



JAPAN HERITAGE

日本遺産



韓志倭人伝のクニグニネットワーク

平成28年度 東アジア国際シンポジウム

大海を渡り、

一支国に至る。

国境の島

壱岐

原の辻遺跡

における日韓交流



壱岐会場

平成28年

10月22日(土)

13:00 ~ 15:30

壱岐市立一支国博物館 [3階多目的ホール]
〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515-1

長崎会場

平成28年

10月23日(日)

13:30 ~ 16:00

長崎歴史文化博物館 [1階ホール]
〒850-0007 長崎県長崎市立山 1-1-1

長崎県埋蔵文化財センター

ごあいさつ

九州本土と朝鮮半島との間、玄界灘に浮かぶ壱岐島は、「魏志倭人伝」にも描かれているように古代から朝鮮半島や中国との対外交流において重要な役割を果たしてきました。このような歴史的背景を踏まえ、長崎県埋蔵文化財センターでは開設以来、東アジア世界との交流の歴史に焦点をあてた研究を進めています。

その東アジア考古学研究の一環として、平成27年5月に友好交流協定を締結した韓国・釜山博物館をはじめとする国内外の研究機関のご協力を得ながら、これまで原の辻遺跡で出土した大陸・半島系土器全点について全面的な再検討を行ってきました。その結果、多くの新たな知見を得ることができ、平成28年3月にはその内容をとりまとめた成果として、報告書『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』を刊行いたしました。

本日のシンポジウムでは、『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』で明らかにした成果を皆様に公開いたしますとともに、弥生時代の日韓交流研究の第一人者である福岡大学の武末純一教授、韓国・釜山の第一線で調査研究にあたられている釜山博物館の安海成学芸研究士をお招きして、最新の研究成果を基に、壱岐島における日韓交流の実態に迫ります。テーマは『「大海を渡り、一支国に至る。」—国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流—』です。人々は大海を渡り、何のために原の辻にやってきたのか、渡ってきた人々は原の辻で何をしていたのかといった交流の具体像について、これまでの想定を塗り替える内容になるものと考えていますので、どうぞご期待ください。

結びにあたり、このシンポジウムへの出席をご快諾いただきました講師の先生方をはじめ、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今回のシンポジウムを契機に、日本と韓国との文化交流がますます深まりますことを祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

平成28年10月22日

長崎県埋蔵文化財センター所長
岩 永 正 弘

目 次

巻頭カラー	1頁
原の辻遺跡における日韓交流	
長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室 古澤義久	3頁
三韓時代韓半島土器文化の展開と韓日交流の一側面	
釜山博物館文化財調査チーム 安海成	15頁
弥生時代の日韓交流	
福岡大学人文学部 武末純一	29頁
講師プロフィール	38頁

原の辻遺跡出土の大陸・半島系土器



粘土帯土器・擬粘土帯土器



楽浪系土器



遼東系土器



三韓系瓦質土器



馬韓系土器



陶質土器

原の辻遺跡における日韓交流

長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久

I. 原の辻出土大陸・半島系土器の様相

未報告資料も含めて原の辻出土遺物を再点検した結果、大陸・半島系土器が 1243 点（破片数）確認された（表 1）。これは日本列島弥生時代遺跡の中で第 1 位の出土量となる。

出土した大陸・半島系土器には、粘土帯土器・擬粘土帯土器、楽浪系土器・遼東系土器・擬楽浪系土器、三韓系土器・列島産格子タタキ土器、陶質土器などがある。

表 1 原の辻出土大陸・半島系土器点数

	粘土帯	擬粘土帯	楽浪・遼東系	擬楽浪系	三韓系	列島産格子タタキ	陶質	不明	計
安国寺前A	1		2		3		1		7
蘭繰									0
川原畑		2							2
不條	114	48	22	1	23		26		234
八反	32	11	158		150	5	34	6	396
鏡ノ池	2				2				4
芦辺高原	3	1	6		11				21
石田高原	16	4	76	1	146		24	2	269
高元	8		67		83		21	3	182
原	6	3	17		39		4	12	81
石田大原	1		14		8	1	2		26
柏田									0
大川							1		1
原ノ久保									0
池田大原									0
菅ノ木									0
不明	2		6		9		1	2	20
計	185	69	368	2	474	6	114	25	1243

II. 東アジアにおける原の辻

(1) 原の辻の成立

原の辻では弥生時代前期後葉・末に集落が形成されるが、それ以前の時代との連続性がない。縄文時代の遺跡が比較的住みやすい箇所立地するのとは比べ、原の辻は住みにくい箇所であるが、人為的に選択されて、集落が形成されている。集落が人為的に突如形成された原因を解く鍵の一つが韓半島系土器である。原の辻の集落が形成されて間もない弥生時代前期末・中期初頭の土器と円形粘土帯土器が 2007 年度不條地区 SX02 で共伴していることが確認されている。集落が形成された時点からほどなくして、既に韓半島との交流は行われていたということが了解される。そこで、先述の集落形成の人為性と併せて考えると、原の辻は韓半島との交流を目的の一つとして形成された集落であるという可能性が高いとみることができる。ただし、半島系土器が弥生土器を凌駕する量を占める地点は存在しないので、集落形成の目的のうちの一つであると捉えるべきであろう。

(2) 弥生時代前期末～中期の交流

韓半島南部の粘土帯土器としては甕、把手附長胴壺、長胴壺、高坏、蓋、（黒色）磨研長頸壺、小壺、小型土器などがみられる（図 2-1～14, 21～28）。粘土帯土器では甕・鉢が多い

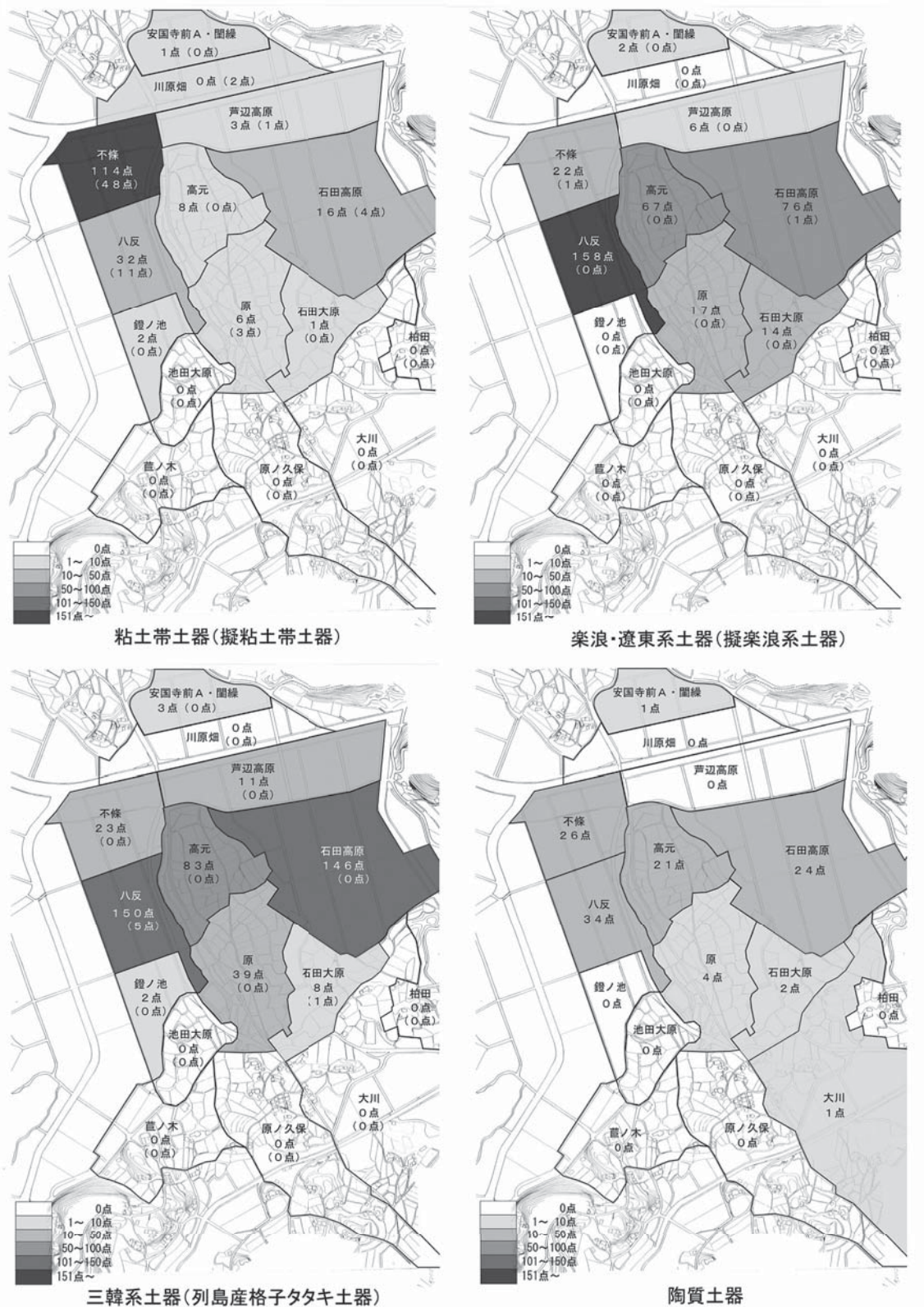


図1 原の辻における大陸・半島系土器の分布

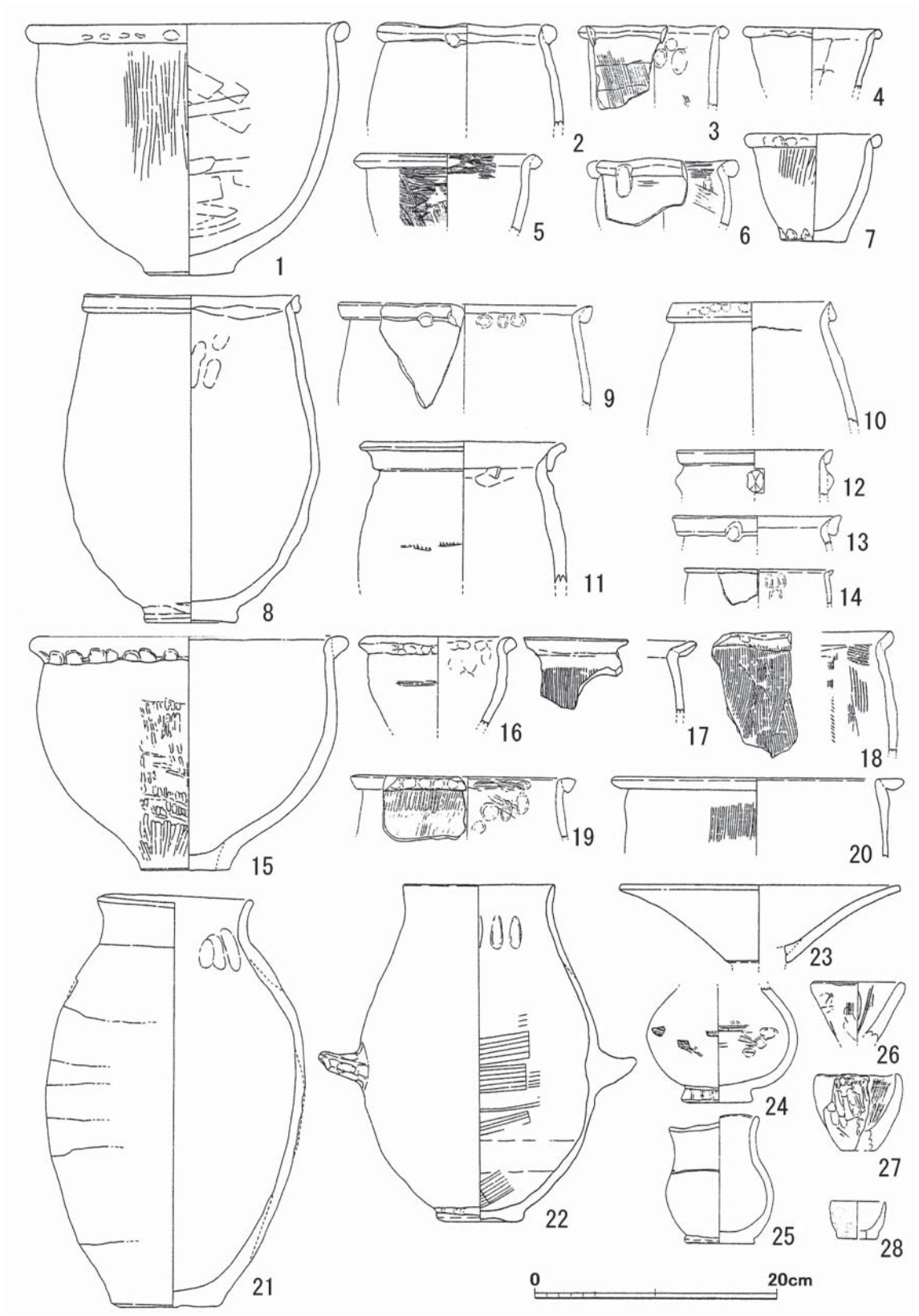


図2 原の辻出土粘土帯土器・擬粘土帯土器

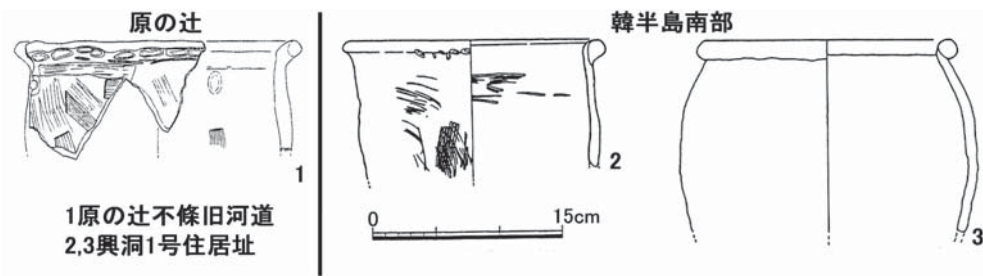


図3 原の辻と興洞の比較

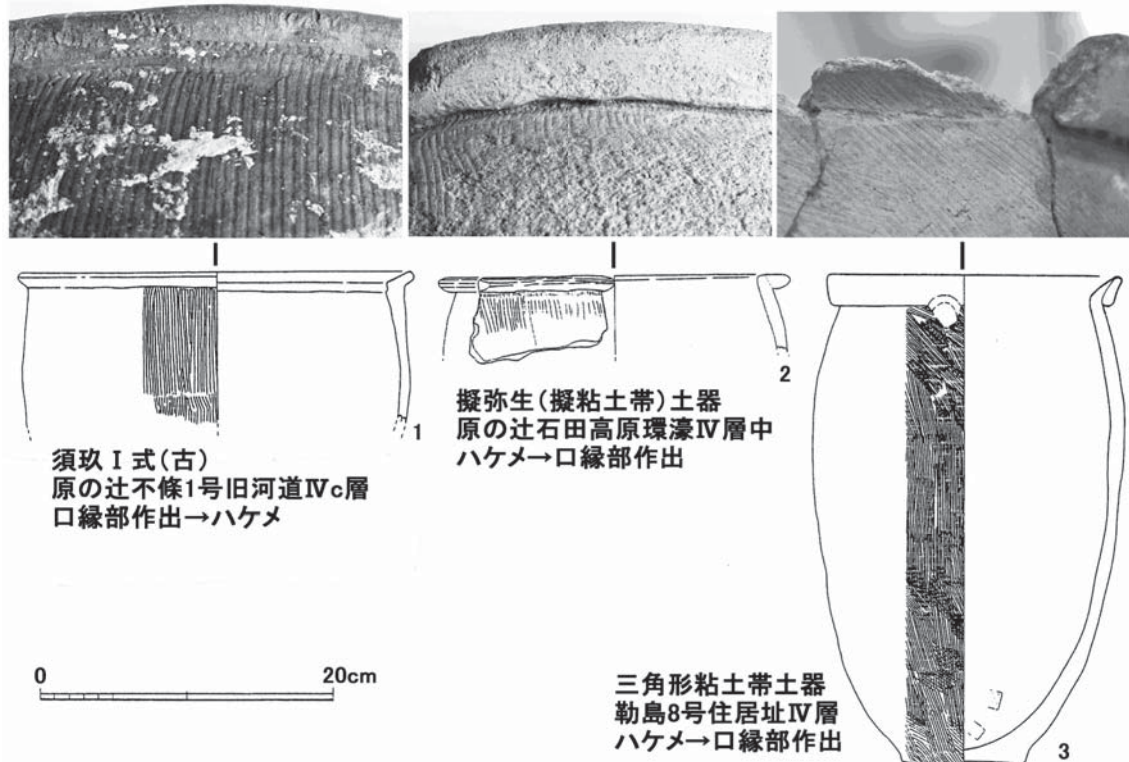


図4 ハケメと口縁部作出順序の比較

が、牛角把手附壺も一定量あり、器種が比較的良好揃っている。このように生活に必要な土器に加え、(黒色)磨研長頸壺(図 2-24)や小型土器(図 2-26~28)など祭祀色も強い土器が出土することから、一定期間の粘土帯土器人の滞在が考えられる。粘土帯土器には円形粘土帯土器(図 2-1~7)と後続する三角形粘土帯土器(図 2-8~14)の両者が認められる。原の辻遺跡内での分布は北西側低地の不條地区に集中しており(図 1)、渡来人の拠点があったことが窺える。但し、不條地区であっても、弥生土器が圧倒的に主体であるため、渡来人のみで構成される居住地があったというわけではないことには注意しておく必要がある。

原の辻では、粘土帯土器を模倣した擬粘土帯土器が出土している(図 2-15~20)。このような擬粘土帯土器(擬弥生土器)と韓半島南部で出土した弥生系土器には片岡宏二(2001)が指摘するように非常に類似した土器が認められる。片岡は三角形粘土帯土器期の葉城や大成洞焼成遺蹟と原の辻を比較したが、それに先行する円形粘土帯土器期の興洞でも原の

辻の擬粘土帯土器と類似する土器が確認された（図 3）。土器の製作には通常、強い規制があるとみられるが、原の辻では、さまざまな要素を取り入れたり、模倣した土器が製作されたり、使用が許容されていることからみて、原の辻は、比較的規制の緩い、彼我の土器様式の緩衝地区として一種の特区となっていたかもしれない。

このような擬粘土帯土器や韓半島南部出土弥生系土器の製作者については、中園聡（1993）によって検討されたことがある。しかし、擬粘土帯土器や弥生系土器の製作者を確定するには依然、困難な点が多い。そこで、筆者は、土器製作の流儀や癖といった基層的な要素の一つであるハケメ調整と口縁部作出の順序に着目し製作者の同定を試みた。粘土帯土器では、まず外器面に全体的に口縁までハケメ調整を行った後に、口縁部の粘土帯を貼り付けている（図 4-3）。一方、弥生土器では口縁部を作出してからハケメ調整を行っており（図 4-1）、粘土帯土器の製作方法とは異なる。原の辻遺跡で出土した擬粘土帯土器の中には、口縁部は明らかに弥生土器を意識して製作されているものの、ハケメ調整・口縁部作出順序は粘土帯土器と共通する土器がある（図 4-2）。このような土器は粘土帯土器文化人が、弥生土器を模倣して製作した土器であるとみることができる。先・原史時代の土器製作が、女性によってなされたという多くの民族誌を鑑みると、女性も渡来していた可能性が指摘できる。これまで原の辻では交易の側面が強調されてきたが、女性を含む集団が渡来したとなると、単なる交易だけが目的ではなく移住という可能性も考慮したほうがよい。

早良平野、佐賀平野、熊本平野、大村湾など九州本島では墓地で韓半島系土器が利用される例があり、渡来人やその子孫、または韓半島と強い関係を持つ人物が葬られたものとみられ、渡来人の定着が想定される。一方、原の辻ではこれだけ多くの半島系土器が出土しているにもかかわらず、半島系土器が利用された墓地は確認されていない。そのため、移住してきた人々の主たる目的地は原の辻ではなかった可能性が高く、中継拠点として利用されたものとみることができる。

移住が認められる一方、交易も行われていた。土器以外の大陸・半島系遺物としては、粘土帯土器が集中して出土した不條地区 3 号旧河道出土細形銅剣などもみられるが、墓地から出土する例も多い。該期の居住域のある丘陵より南に位置する石田大原地区では弥生時代前期後葉以降、甕棺墓などが営まれているが、ここでは前期末～中期前葉の甕棺墓で天河石製白玉（図 5-1,2）、天河石製勾玉（図 5-3）、トンボ玉（図 5-4～7）、戦国式銅剣（図 5-8）、土壙墓で細形銅剣、墓域包含層で多鈕細文鏡（図 5-9）などの大陸・半島系文物が出土している。渡来文物の中でも貴重な物品が弥生人の手に渡り、副葬されているという状況からは交易も存在していたことは十分に考えられる。船着き場は大陸由来の工法が採用され、粘土帯土器期の把手や赤彩された 2 条突帯鑄造鉄斧といった大陸・半島系遺物が出土しており、船着き場が半島との交流の舞台であったことを示している。

次に楽浪郡との関係について述べる。土器では滑石混和花盆形土器と須玖Ⅱ式が 1998 年度不條地区 E 区 1 号土壙で共伴している（図 7-1）。また、溝であるため確実性は劣るが、2009 年度八反地区 4 号溝でも滑石混和楽浪系土器底部（図 7-5）が須玖Ⅱ式とともに出土している。武末純一らの指摘（武末 2004）のとおり煮沸具がもたらされたとみると、須玖

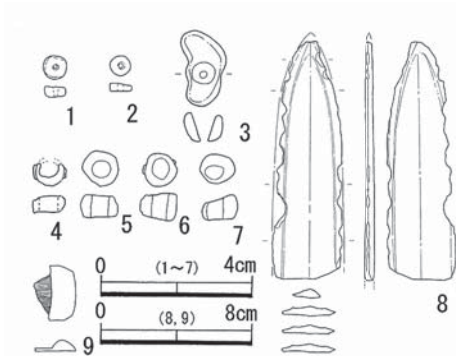


図5 弥生時代前期末～中期の大陸・半島系遺物

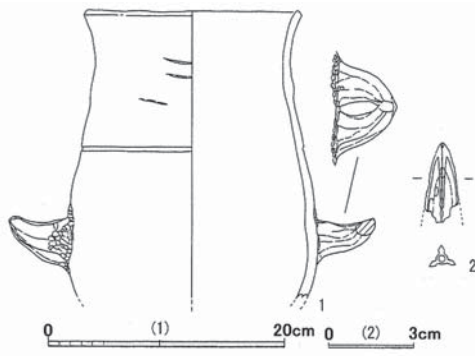


図6 不條 E 区 16号土坑出土遺物

Ⅱ式段階の楽浪人の直接渡来が想定される。楽浪系泥質土器の弥生時代中期の確実な共伴例は、まだ発見されていないが、弥生時代前期末から中期末の河川跡から、楽浪系筒坏を模倣した酸化焰土器（図 7-22）が出土していることから、泥質土器も少量、搬入されていた可能性がある。不條地区で出土した西漢五銖銭 1 点も楽浪郡との交流でもたらされたものである。須玖Ⅱ式段階より前段階の韓半島西北部・中国東北部との関係を示す可能性がある資料としては、先述のトンゴ玉などの墓地出土品以外に、1998 年度不條地区 E 区 16 号土坑で弥生時代中期初頭～前葉の土器、粘土帯土器に伴う組合式牛角把手付長胴壺（図 6-1）とともに出土した三翼鏃（図 6-2）が挙げられるが、粘土帯土器との共伴もあり、韓半島南部を経由した交流であった可能性もある。

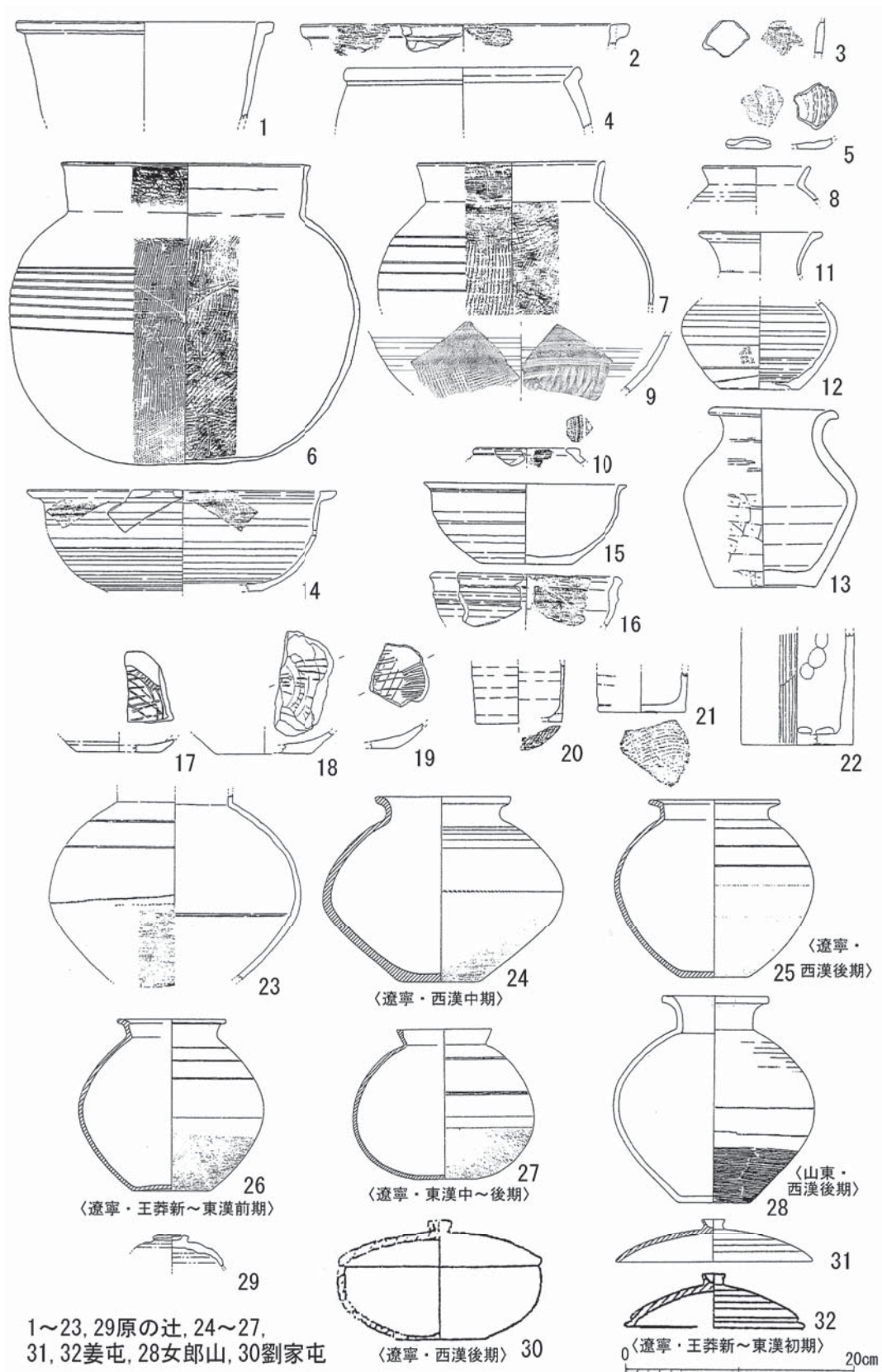
交流は移住と交易に留まらず、弥生人の精神文化にも及んでいた。1995 年高元地区調査における弥生時代中期後葉の 9-B7 号住居址で肩甲骨 6 点（内 2 点は確実にト骨）のト骨が発見されており、大陸由来のト骨が既に、受容されていたことがわかる。

(3) 弥生時代後期の交流

弥生時代後期になると楽浪系土器と三韓系土器の双方が原の辻に搬入されるようになる。楽浪系土器には花盆形土器（図 7-1,2,5）、中型鉢（図 7-4）、泥質土器では短頸壺（図 7-6～8）、盆（図 7-9）、長頸壺（図 7-11～13）、鉢（図 7-14～19）、筒坏（図 7-20,21）、瓮（図 7-10）などがみられる。短頸壺が多いが、鉢が相当数みられ、筒杯や小型壺も一定量みられる。瓮は楽浪郡で一般的な器種であり、韓半島南部でも新昌洞や勒島でも類例が出土しているが、原の辻出土品は非常に小型であることが特徴的である。三韓系土器には短頸壺（図 8-1,2）、長頸壺（図 8-3,4）、甕（図 8-8,9）、鉢（図 8-10）などがみられる。三韓系土器では圧倒的に短頸壺をはじめとする壺が圧倒的に多く、そのほかの器種は少ない。

前段階の粘土帯土器は北西低地部に集中しているが、楽浪系土器と三韓系土器は丘陵部でも多く出土している（図 1）。また、器種も運搬具である短頸壺が中心となる。そのため宮崎貴夫は、運搬具が中心に丘陵部に搬入されたとみて、粘土帯土器期の自炊生活から、丘陵内での饗応を受けるように変化したとみている（宮崎 2000,2005）。

三韓系土器は丘陵の東西で同程度出土する一方、楽浪系土器は明確に西側で多く出土する。このように三韓系土器と楽浪系土器の分布がやや異なることは、三韓人が楽浪土器も



1～23, 29原の辻, 24～27,
31, 32姜屯, 28女郎山, 30劉家屯

図7 原の辻出土楽浪系土器・擬楽浪系土器・遼東系土器と大陸での類例

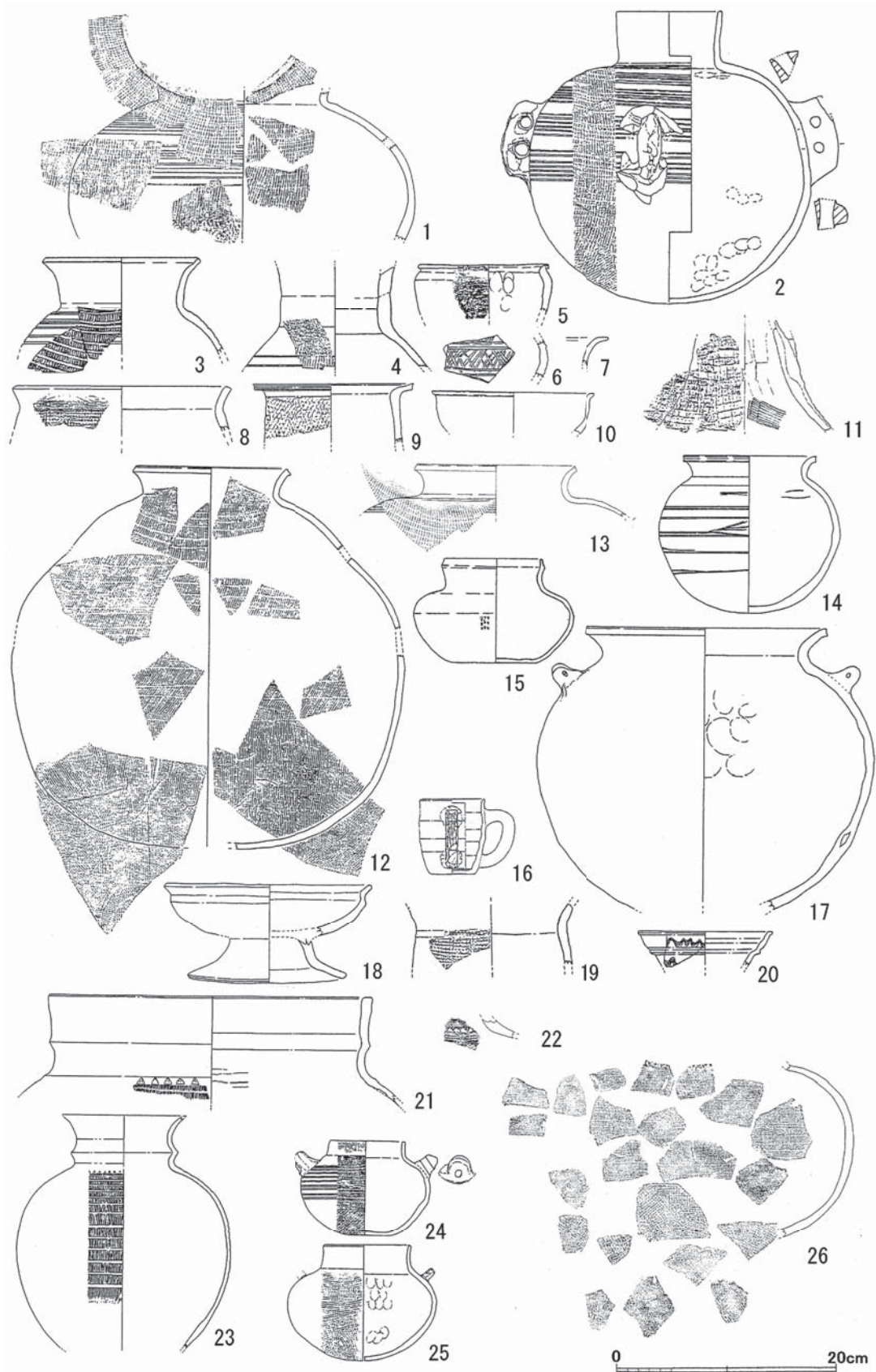


図8 原の辻出土三韓系土器・列島産格子タタキ土器・陶質土器

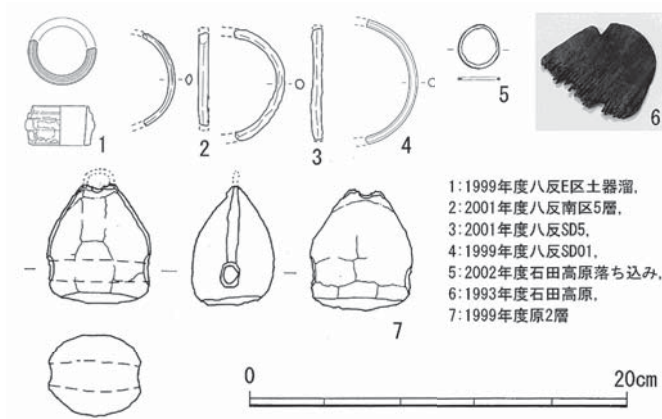


図9 弥生時代後期～古墳時代前期の大陸・半島系遺物

- 1: 1999年度八反E区土器溜,
- 2: 2001年度八反南区5層,
- 3: 2001年度八反SD5,
- 4: 1999年度八反SD01,
- 5: 2002年度石田高原落ち込み,
- 6: 1993年度石田高原,
- 7: 1999年度原2層

携えて渡来したという状況ではなく、三韓系の集団と楽浪系の集団がそれぞれ別個に渡来したという状況を示唆する。近年、福岡平野での集落単位で韓半島系土器の組成の差異があり、対外交渉の相手先や内容によって受け入れ先が異っており、クニのネットワークの中で調整・管理されていたという見解（森本 2015）が提示されている。そのような調整・管理が原の辻にも及び、集落内の地点によっ

て組成が異なるという結果を招いた可能性がある。

少数ではあるが、遼東系土器がみられることも注目される。図 7-23 は遼東地域や山東地域の西漢中期～東漢後期の資料（図 7-24～28）に類例があり、図 7-29 は、遼東地域の西漢後期～王莽新・東漢初期の資料（図 7-30～32）に類例がある。遼東郡等との直接交流というよりも楽浪郡を介した交流により搬入されたとみた場合、楽浪系泥質土器の多くが弥生時代後期に属するとすると、遼東系土器についても当面のところ同様の年代を考えておきたい。どのような経緯で遼東郡の土器がもたらされたか判断することはできない。楽浪郡に持ち込まれていた遼東・山東の土器が、壱岐まで搬入されたとみることできる。いまひとつ考えられるのは、遼東郡は長安・洛陽—楽浪郡間の交通において必ず通過する位置にあることから、場合によっては外交によりもたらされた可能性もないことはない。

さて、前段階の弥生時代中期には韓半島粘土帯土器を模倣した土器が比較的多くみられたが、弥生時代後期の大陸・半島系土器においては模倣土器はほとんどみられない。三韓系土器製作に用いられる格子タタキ技法が導入された弥生土器（図 8-11）が出土しているが、同様の土器は元岡・桑原遺跡群でも出土しており、糸島地域との関係で製作または搬入された可能性があり、韓半島との交流下で製作されたものではない可能性もある。また、韓半島の技術の一部が導入された弥生土器であり、三韓系土器の模倣土器というわけではない。先に模倣土器製作の背景として女性の渡航を想定したが、このことから推察すると、瓦質土器段階に模倣土器がほとんどみられない原因の一つとして、相対的に女性の渡航が少なかったという可能性が挙げられる。この段階の交流は、移住というよりは交易や外交に比重がおかれる交流に変化したと捉えることはできないだろうか。

弥生時代後期以降では、墓地でも大陸・半島系文物が出土することはあるが、丘陵部や丘陵付近の低地部でも大陸・半島系文物が出土することが多くなる。特に八反・不條地区など西側低地部や石田高原地区を中心に、土器溜や環濠、溝などの遺物集中部などで、ミニチュア車馬具（図 9-1）、銅釧（図 9-2～4）、銅指環（図 9-5）、木製櫛（図 9-6）などの漢系文物が出土しており、交易によって得られたものとみられる。そのうち、土器溜出土品などは弥生人の手に渡った後、祭祀などに利用されたものとみられ、交易後の使用事例を



図 10 原の辻における中国貨幣の分布

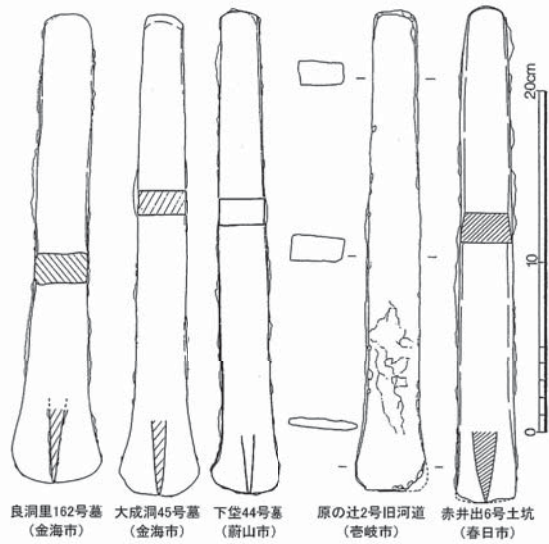


図 11 棒状鉄斧の比較

示すものといえよう。また、青銅製権（図 9-7）は商取引で用いられた可能性も考えられる遺物である。

原の辻では、五銖銭 1 点のほか大泉五十 1 点、貨泉 14 点、総計 16 点の中国貨幣が出土している（図 10）。貨泉は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭に最終的に埋没した溝から出土する例が多い。西側低地部に多く分布しているが、西側低地部では三韓系土器よりも楽浪系土器の出土が多いため（図 1）、筆者は中国貨幣の搬入に際し、楽浪人が関与したものとみている。交易の対価として利用されたものとしては鉄が注目される。三国志魏書東夷伝弁辰条には「〔弁辰の〕国々では鉄を産出する。韓・濊・倭がみな鉄を取っている。どの市場の売買でもみな鉄を用いていて、中国で銭を用いているのと同じである。そしてまた〔鉄を楽浪・帯方〕二郡にも供給している。」（江畑・井上訳注 1974）という記述がみえるが、これと関連する遺物として韓半島南部では規格化された棒状（板状）鉄斧が出土している。同様の棒状鉄斧は原の辻でも不條地区 2 号旧河道でも出土している（図 11）。原の辻例は長さ約 28.5cm、幅約 2.4cm、刃部幅、4.0cm、重さ 579.9g であるが、慶尚南道金海市大成洞 45 号墓では長さ 28.3cm、幅 2.8cm、刃部幅 4.7cm、重さ 575.9g と極めて近似した数値を示す棒状鉄斧が出土している。韓半島南部の物品貨幣経済の影響を沓岐も受けていたとみるならば、魏志倭人伝の対馬国・一支国にみられる「南北市糶（南北から米穀を買い入れている）」という記述が注目され、考古学的には立証が困難ではあるが、東潮が主張するようにコメも物品貨幣として流通した可能性（東 2006）がある。

精神文化面では、弥生時代中期に引き続き高元地区や八反地区土器溜で弥生時代後期に属する卜骨が発見されている。注目されるのは 2002 年度調査石田高原地区環濠から出土した弥生時代後期中頃～後葉に属する龍線刻土器である（図 12）。この土器は伏龍と昇龍が描かれ、その中間には雷文が描かれる。許慎『説文解字』（永元 12（紀元 100）年）には龍は春分に天に登り、秋分に淵に潜むという記述がみられ、土器に描かれた生態と一致する。

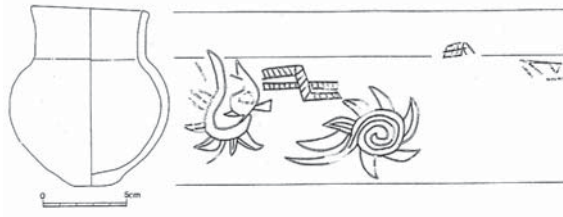


図 12 原の辻出土龍線刻土器

この土器自体は弥生土器であるため弥生人の製作によるものであることは間違いないが、実際に生態を観察することのできない、大陸人の想像上の動物である龍の生態を弥生人は把握した上で正確に描いていることは、大陸・半島との交流が思想面、精神文化にまで深く及ぶものであったことを示している。なお、近年、武末純一によって各

地で出土する硯などの遺物から、弥生時代の文字（漢字）使用を想定する見解（武末 2009 など）が提示されている。龍といった概念的な生物をこれほど正確に描写できるということは、一部の弥生人の漢語運用能力は相当なものであることを示すが、それにもかかわらず漢字のみを知らないということは考えがたいので、筆者としても、交易や外交の実務を担当する弥生人が漢字を使用していたとみる見解に賛成である。

(4) 古墳時代前期の交流と集落の終焉

韓半島南部の陶質土器には短頸壺（図 8-12,13）、壺（図 8-15）、甕（図 8-19）、長頸壺（図 8-20）、台附鉢（図 8-18）、ジョッキ形土器（図 8-16）などがみられる。陶質土器でも短頸壺類が多い傾向は三韓系土器と同じであるが、より小型の長頸壺も比較的多い。三韓系瓦質土器・陶質土器の中には馬韓地域の土器と考えられる土器がある。肩部に鋸歯文がめぐる土器（図 8-21～23,26）や縦穿孔の耳を持つ短頸壺（図 8-24,25）などが該当する。また、胴上部は平行タタキ、胴下部は格子タタキというようにタタキ具を使い分けている資料（図 8-1,26）も一定数みられるが、このような土器は寺井誠によると湖南・湖西に多く分布するという（寺井 2001）。陶質土器の分布は北部丘陵、丘陵西側低地、丘陵東側低地と分布が散漫になり、丘陵部に集中するという状況はみられなくなる。陶質土器は三韓系瓦質土器ほどの量ではないが、一定量出土していることから、布留式期においても韓半島南部との交流は継続していたことがわかる。

この時期の日韓間の貿易について久住猛雄は、「原の辻=三雲貿易」が解体し、代わって福岡平野が中心となる「博多湾貿易」が成立するとし、この背景に畿内に成立した新しい倭王権との密接な関係性を想定している（久住 2007）。「博多湾貿易」を中心的に担った福岡市早良区西新町では多くの畿内系・山陰系土器が認められる一方、半島系土器としては加耶系土器のほか、馬韓系土器が出土しているが（武末 2000）、原の辻でも同様の土器組成を示していることから、原の辻は博多湾貿易における拠点の一翼を担っていたことがわかる。西新町での半島系土器の器種組成は、同時代の韓半島南部の組成の中から選択的に取り入れたものであると指摘されているが（吉村・重藤・吉田 2009）、原の辻での半島系土器の組成と西新町での組成が一定程度重なることは、原の辻における交流と西新町における交流が一連のものであったことを強く示唆する。但し、西新町では半島系のカマドが設けられた住居跡や、韓半島の影響を受けた折衷的な古式土師器が認められる一方、原の辻ではこれまでのところそのような遺構・遺物はほとんど確認されていないという差異も認め

られる。これらの差異点から、西新町の渡来人は、より定着・滞在的である一方、原の辻では、より中継・通過的であったとみられる。

原の辻では4世紀中頃に集落が解体している。これに先立つ時期である313年に楽浪郡が、314年に帯方郡が高句麗によって滅ぼされる。この東アジアにおける変動が原の辻の解体を惹起したという見解（宮崎 2001, 2008b）がある。先にみたように、原の辻における対外交流における楽浪郡・帯方郡との関係は三韓との関係と比しても小さくなかったため、集落解体の契機に繋がったものと思われる。

4世紀後半には原の辻の集落は解体されているが、この頃、沖ノ島における祭祀が開始される。沖ノ島の祭祀が国家的な祭祀であることから、この時期に倭王権は、壹岐を介さない、宗像 - 沖ノ島 - 対馬北部 - 韓半島という新しい経路が利用するようになったものとみられている（宇野 2014）。

Ⅲ. 交流からみた原の辻遺跡の性格

原の辻では、弥生時代後期前葉頃に環濠等が埋まり集落が後退する時期に大陸・半島系土器の出土が低調化する時期がみられるものの、基本的には、集落成立から解体まで一貫して、大陸・半島系土器がもたらされていた。大陸・半島系土器の出土点数も多い。このような現象を、原の辻における交流の活発性と結びつけるのも一つの考え方として成立するが、そのほかにも、韓半島を出発した集団が、高頻度で原の辻等壹岐の遺跡を経由して、九州本島を目指したとみることもできよう。先・原史時代の航海においては、風待ち・潮待ちの必要があるため、滞在期間が長期化する場合があります、その結果、土器の破損・廃棄率が増加したため、多くの大陸・半島系土器の出土に結びつく可能性があるからである。韓半島南部で出土する弥生土器・弥生系土器は遠賀川以西の北部九州系土器が主であるが、遠賀川以東の地域や、より東方の本州系土器も少数ではあるが認められる（井上 2014, 李昌熙 2015）。原の辻でも量的多寡はあるが、遠賀川以東地域や本州土器が認められることから、九州本島から韓半島へ向かう場合でも、同様に原の辻等壹岐の遺跡を高頻度で経由したのではないだろうか。このように原の辻遺跡は南北の交流の結節点でもあった。

以上の所論が正しければ、原の辻遺跡とは大陸・半島との交流によって成立し、盛行し、解体していった性格を有する遺跡であるといえることができる。

※本稿は下記文献の内容を再構成したものである。紙幅の都合により、割愛した参考文献については、下記文献を参照いただきたい。

古澤義久 2016a 「邪馬台国時代の壹岐」『邪馬台国時代の狗邪韓国と対馬・壹岐』ふたかみ 邪馬台国シンポジウム 16 資料集

古澤義久 2016b 「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『靺鞨와 하루노쓰지를 통해 본 東아시아 交流의 様相』特別展〈国際貿易港 靺鞨와 하루노쓰지〉連携 学術심포지엄, 国立晋州博物館

三韓時代韓半島土器文化の展開と韓日交流の一側面

釜山博物館 安海成

1. はじめに

‘三韓時代’は青銅器時代と三国時代を結ぶ時期であるとともに、先史から歴史に入る起点であり、考古資料に加え、歴史記録が残っている時代である。考古学で先史と古代の文化相を復元することができる基礎的な資料は土器文化で、時代を決めることができる表示的な土器文化を研究することが考古学者の基本的な使命である。このような研究者の努力のおかげでこの時代の土器文化についての年代観は完成段階に至った。現在、韓国考古学界では、生産—流通など対内的な交流と、交易—移住など対外交流関係の解明について関心がとても高い。その中でも東アジア社会の国際交流は韓半島地域が重要な鍵を握っていると考えられる。韓半島中部地域では楽浪系土器が多量に出土しており、南部地域では弥生土器が出土している。また、青銅器・鉄器文化の受容と波及は東アジア3国の交流と密接に関連し、物質文化の変動を引き起こした。初期鉄器—原三国時代の土器文化は原住民の在来技術と移住民の新技术が結合しながら完成した。新技术は韓半島社会を急進的に変化させ、日本の北部九州まで波及した。

2. 土器文化の展開と考古学的特徴

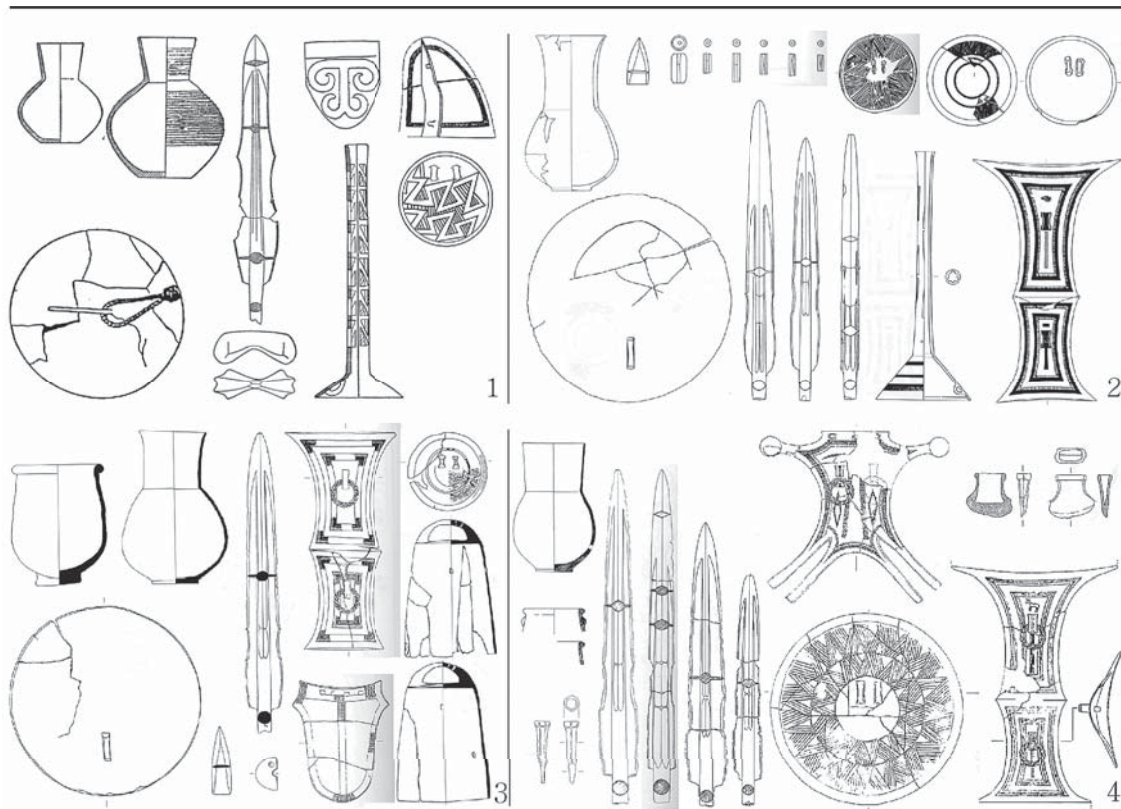
韓国考古学で通時的な時代区分論は‘初期鉄器時代—原三国時代’である。初期鉄器時代の開始は鉄器の出現時点ではなく、粘土帯土器文化の登場で、原三国時代の開始は瓦質土器文化の出現である。そして、韓半島中部地域では硬質無文土器と打捺文土器が原三国時代の代表的な土器であると認定されている。

表 1. 韓国三韓時代土器の分類

粘土帯土器	円形粘土帯土器	甕, 把手附壺, 黒陶長頸壺, 高坏, 蓋
	三角形粘土帯土器	甕, 把手附壺, 黒陶長頸壺, 高坏, 蓋, 浅鉢
瓦質土器	前期瓦質土器	袋壺, 組合牛角形把手附壺, 短頸壺, 長胴壺, 蓋, 浅鉢
	後期瓦質土器	台附広口壺, 台附直口壺, 爐形土器, 短頸壺, 両耳附壺, 尖底甕, 蓋, 高杯
硬質無文土器(中島式土器)		外反口縁甕, 内湾口縁甕, 把手附甕, 甌, 有頸壺, 盆形土器, 蓋
打捺文土器		円底短頸壺, 大壺, 大甕, 深鉢形土器, 長卵形土器, 甌

1) 粘土帯土器文化

粘土帯土器文化の開始は円形粘土帯土器をはじめ黒陶長頸壺・把手附長頸壺・高坏などが代表的な器種として知られている。円形粘土帯土器は以後、三角形粘土帯土器に変化するが、黒陶長頸壺と高坏、蓋などは依然として残存する。このような土器文化は青銅器時代ではみることのない新器種で、粘土帯土器文化の登場とともに、松菊里型無文土器文化と遼寧式銅劍文化が消滅し、支石墓の造営が中断する。そのかわり粘土帯土器とともに、木棺墓が新たに造営され、韓国式銅劍文化と鉄器文化が順次登



1: 瀋陽 鄭家窪子 6512号, 2: 礼山 東西里, 3: 大田 槐亭洞, 4: 牙山 南城里

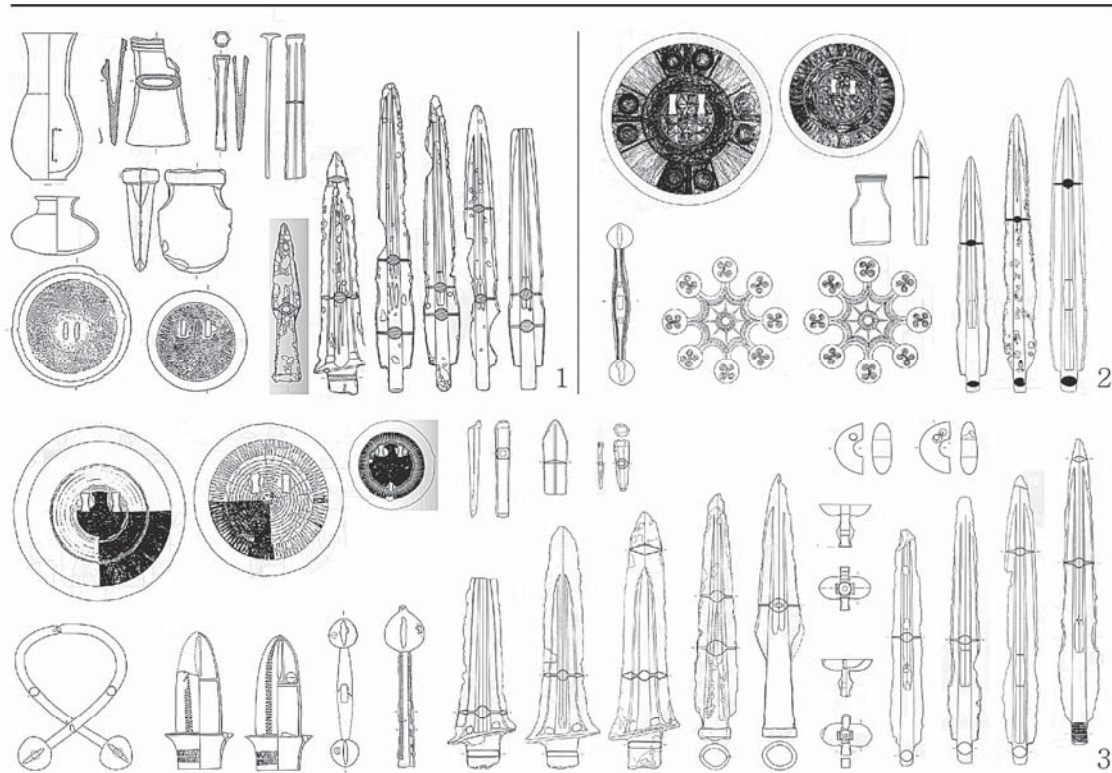
図面 1. 円形粘土帯土器文化と異形青銅器の出現

場しながら粘土帯土器文化が完成する（朴辰一2013）。韓半島で円形粘土帯土器が最初に登場する遺跡は南楊州水石里遺跡で中西部地域に該当する。この段階では円形粘土帯土器とともに把手附長頸壺と黒陶長頸壺が共伴し、石斧・石鏃が出土する。しかし、青銅器・鉄器・木棺墓はまだ登場していない。

南楊州水石里遺跡で円形粘土帯土器が登場した後、安城盤諸里遺跡、高城松峴里遺跡など中西部地域一帯に拡散する。安城盤諸里遺跡では3基の土壙墓が報告されたが、石棺墓とみる研究者もおり、積石木棺墓と判断する研究者もいる。大田槐亭洞・牙山南城里・礼山東西里などでは積石木棺墓¹が本格的に登場²する。青銅器は韓国式銅剣・多鈕粗文鏡をはじめ剣把形銅器・円蓋形銅器・喇叭形銅器など異形青銅器が出現するが、まだ鉄器は登場していない時期である。この時点を前後して円形粘土帯土器・韓国式銅剣・多鈕粗文鏡・積石木棺墓（木棺墓）で構成される初期韓国式銅剣文化が完成する。このような青銅器組成は鄭家窪子6512号墓と直接的に連結することができる（図面1）。遼西の十二台営子類型を継承したものとして知られた鄭家窪子の青

¹ 牙山南城里、大田槐亭洞、咸平草浦里、和順大谷里などこの時期に登場する墳墓の墓制は積石木棺墓と判断する見解と積石石棺墓と判断する見解にわかれる。筆者はこれについて明らかにする見解を持たないが、以前の時期で現れない新しい墓制であることは明らかで、このような形態の墓制は木棺墓の初現形態であると判断される。

² 積石木棺墓の起源は韓国式銅剣を共伴する旅順尹家村12号墓に探することができる。



1: 扶余 九鳳里, 2: 和順 大谷里, 3: 咸平 草浦里

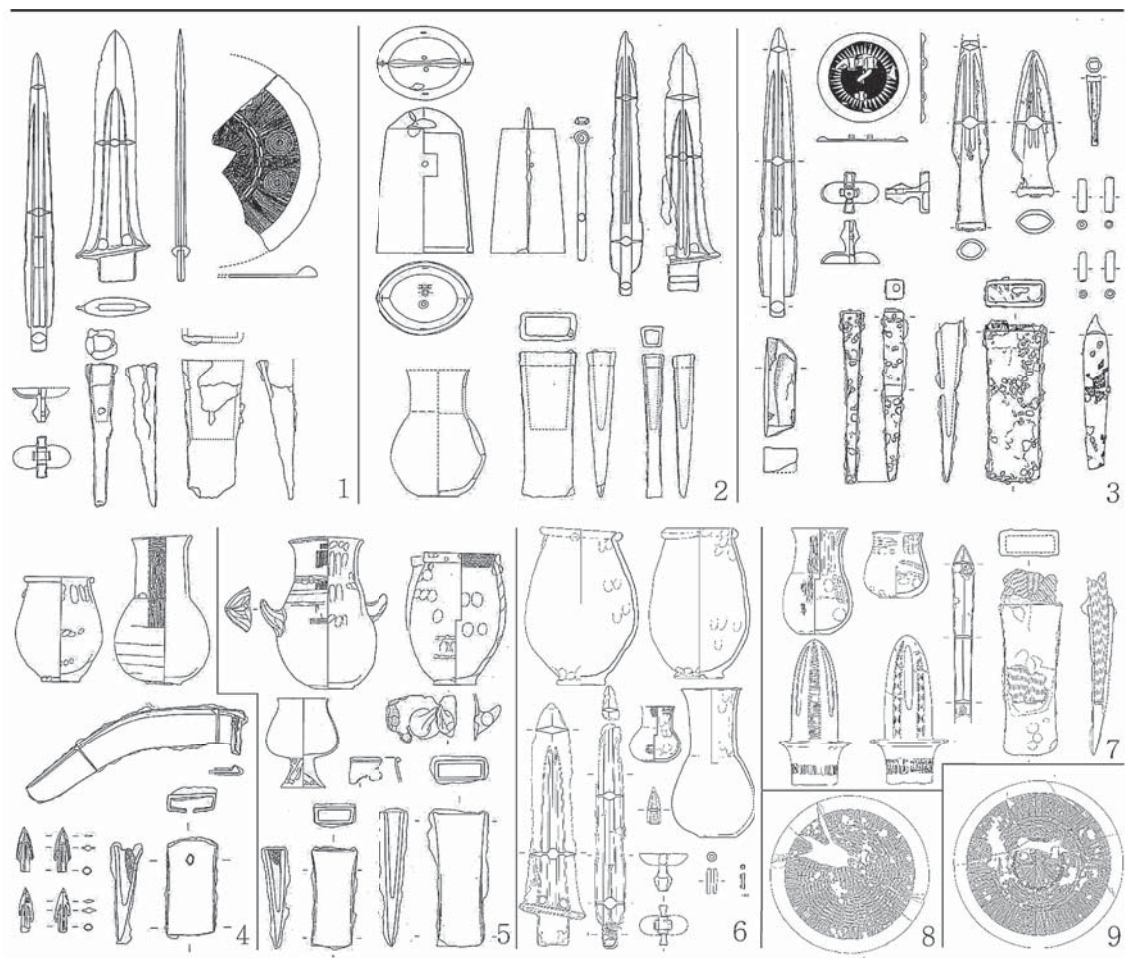
図面 2. 円形粘土帯土器文化と銅鈴類青銅器の出現

銅器は中西部地域で主として確認され、嶺南地方では出土事例³がない（韓国考古学会 2010）。以後、扶余九鳳里・和順大谷里・咸平草浦里など湖西・湖南地域に韓国式銅剣文化が拡大しながら青銅器の組み合わせが変化する。粗文鏡は細文鏡へ変化し、青銅儀器類は八珠鈴・双頭鈴・竿頭鈴など銅鈴類に転換する。このほかにも銅矛・銅戈など武器類が出現し、銅斧・銅鑿・銅ヤリガンナなど青銅製農・工具も現れる（図面 2）。

一方、多鈕細文鏡をはじめとする韓国式銅剣文化が絶頂を迎えた頃、戦国系鉄器文化が登場する。扶余合松里・唐津素素里・長水南陽里などで鑄造鉄斧・鉄鑿・鉄ヤリガンナで代表される農・工具類が副葬される。完州葛洞・徳洞・新豊遺跡など万頃江流域では鉄器とともに木棺墓の群集化現象がはじめて現れる。完州葛洞4号墓では三角形粘土帯土器と牛角形把手附長頸壺の組み合わせが初めて登場し、新豊53号墓では牛角形把手附長頸壺とともに、円形と三角形粘土帯土器が共存するものと判断される（図面3）。

また、東南海岸一帯を中心に三角形粘土帯土器が日常土器として定着しながら弥生人との交流が想定される遺物が出土しはじめる。泗川勒島遺跡では三角形粘土帯土器とともに韓半島で最大量の弥生土器が共伴した。粘土帯土器と弥生土器がともに共伴

³ 慶州入室里収集遺物の中に、肩甲形銅器 1 点が知られているが、発掘事例はない。



1: 唐津 素素里, 2: 扶余 合松里, 3: 長水 南陽里 4号, 4: 完州 葛洞 3号, 5: 完州 葛洞 4号,
6: 完州 新豊 53号, 7: 完州 新豊 54号, 8: 完州 新豊 43号, 9: 完州 新豊 35号

図面 3. 円形粘土帯土器文化と鉄器の出現

する遺跡は海南郡谷里貝塚、金海興洞・亀山洞遺跡・会峴里貝塚と釜山朝島貝塚・萊城住居址・温泉洞遺蹟、蔚山達川遺跡など韓半島南部地域に現れ、相当な期間、交易と移住がなされたことを知ることができる。泗川—金海—釜山—蔚山地域を中心に弥生中期後半に該当する資料が集中的に出土し、後期に該当する資料は急減する（李昌熙 2015）。慶山造永洞EⅢ-15号墓、居昌大也里、南原細田里など南部内陸地域で下大隈式—西新式の後期弥生土器が出土し、弥生人の活動範囲が広がったものと判断されるが、交易とするには出土量は微々たるものである（イエ・ジウン 2011）。韓半島中部地域の加平大成里 29号竪穴でも下大隈式弥生土器が1点確認されているが、弥生人の移動経路が拡大したとみることができる。弥生時代後期には北部九州地域でも嶺南地方の資料が急減するが、このような資料の増減現象は弁辰韓の政治体の成長と変化、交易システムの変化と密接な関連があると考えられる。

2) 瓦質土器文化

韓国考古学界の立場では瓦質土器文化と鉄器文化は三角形粘土帯土器文化とは区分

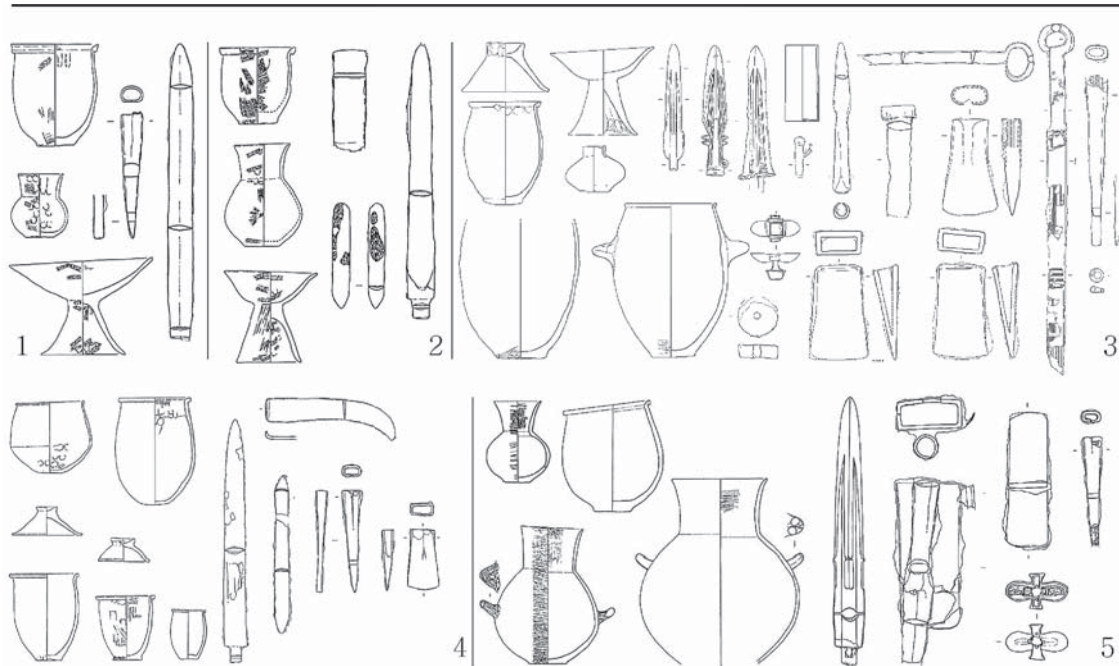
表 2. 韓半島三韓時代土器製作技術の比較

	粘土帯土器系 技術	瓦質土器系 技術
胎土	砂粒が多量に混入された粗い胎土	細かい砂粒が少量混入された精選された胎土
成形	捲上法, 輪積法	陶車法
調整	ハケメ, 磨研	打捺, 回転ナデ
焼成	酸化焰	還元焰

される新しい物質文化の変動であるとみて、原三国時代の開始として設定され、紀元前108年の楽浪郡設置を起点に発生した文化とみる見解が一般的であった。しかし、最近では、瓦質土器は楽浪土器の技術的系譜とは異なり、嶺南地域でも戦国系鉄器の存在などにより、瓦質土器文化の成立時期を楽浪郡設置以前に遡らせる趨勢となっている（鄭仁盛2008）。

原三国時代の土器文化は古式瓦質土器と新式瓦質土器に区分される。古式瓦質土器は袋壺・組合牛角形把手附壺・短頸壺が代表的な器種で、新式瓦質土器は台附長頸壺・台附直口壺・爐形土器・両耳附短頸壺などが代表的な器種である。古式瓦質土器文化は三角形粘土帯土器文化が日常土器として維持されるなかで、瓦質土器が登場し、初期瓦質土器論者が主張する胎土の精選化・還元焰焼成・打捺技法の導入が全体的に適用されない段階である。粘土帯土器段階の黒陶長頸壺・高坏も継続して副葬され、粘土帯土器の製作技術である黒色磨研が袋壺・組合牛角形把手附壺・短頸壺で確認されることもある。また、多数の土器が依然として酸化焰焼成で製作されている。古式瓦質土器段階での青銅器は韓国式銅劍・銅矛・銅戈など武器類が、持続的に副葬されるが、多鈕細文鏡と銅鈴類はほとんど消滅⁴する。そのかわりに草葉文鏡・星雲文鏡・異体字銘帯鏡など前漢鏡が登場し、曲棒形帯鉤・動物形帯鉤・弩機などが登場する。このような青銅器の中で、銅劍・銅矛・銅戈は韓国式銅劍文化の伝統を継承しているもので、漢鏡・帯鉤・弩機などは楽浪から伝わってきたものと評価される。鉄器は戦国系鉄器文化が波及して以来、鉄戈・二条突帯鑄造鉄斧は漸次、消滅し、鋤形鉄器・鉄鑿・鉄ヤリガンナは戦国系鉄器の形態を帯びているが、板状鉄斧・鉄鎌・タビ（叫叫：鋤よりも刃先が狭い農具の一種）・鉄製手鋏など在地系鉄器とともに存続し、在地で製作されたものと判断される。馬具類も慶山林堂洞A I・145号墓・密陽校洞10号墓

⁴ 慶州入室里収集遺物の中に多鈕鏡と銅鈴、銅鐸が確認され、伝慶州出土品の中の肩甲形銅器が湖南地方の青銅器文化と結びつくとみられるが、もう少し多くの事例蓄積が必要なものとして判断を留保しておく。



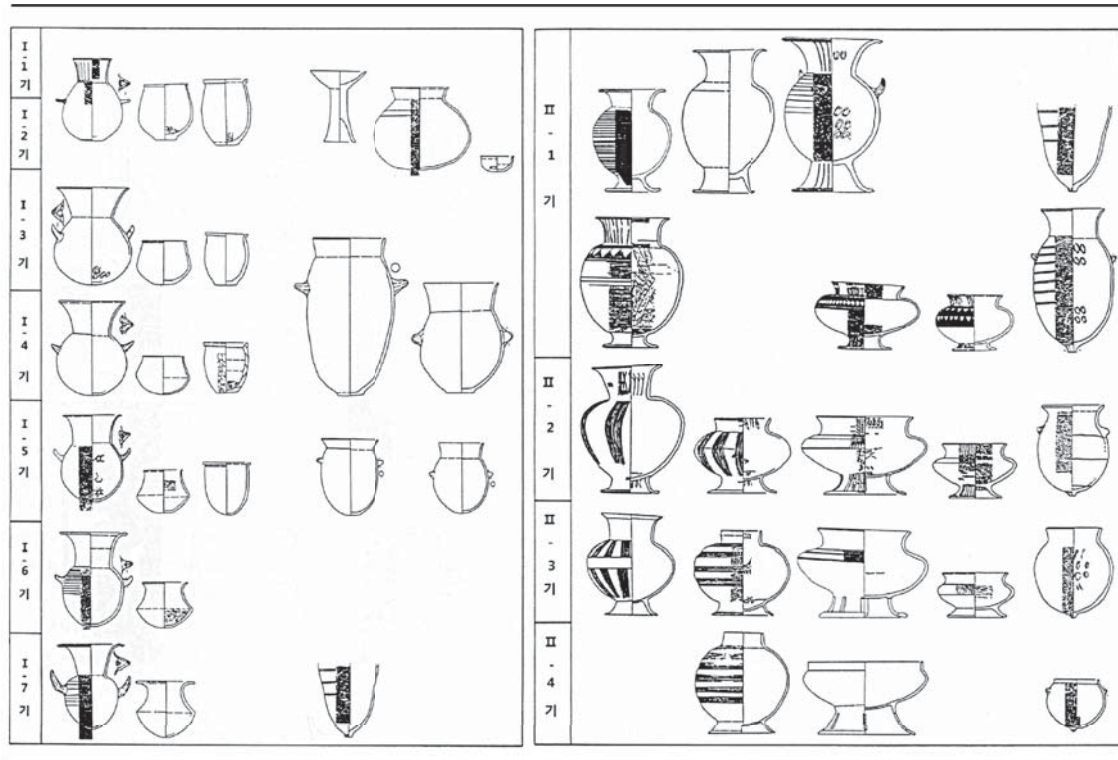
1: 大邱 月城洞 I-2号, 2: 大邱 月城洞 I-6号, 3: 蔚山 校洞里 1号, 4: 大邱 八達洞 30号,
5: 大邱 八達洞 45号

図面 4. 弁辰韓三角形粘土帯土器文化と鉄器初現期

などで早くも登場し、轡の型式はS字形とI形に区分される。銜は2連式と3連式があるが、大部分は2連式であり、2条または3条で撚って作った。後期になると昌原茶戸里104号墓や慶州舎羅里130号墓では轡に蕨形装飾がつけられている（嶺南考古学会2015）。

蔚山校洞里1号木棺墓では三角形粘土帯土器甕・把手附壺・高坏・蓋など粘土帯土器文化が看取されるが、銅劍・銅矛・銅戈・円筒形銅器・蓋弓帽をはじめとした青銅器と鑄造鉄斧・鍛造鉄斧・環頭刀・環頭刀子・鉄矛・鉄鑿など鉄器類及び漆器容器などが共伴し、韓国式銅劍文化と中国系青銅器及び鉄器文化が嶺南地方に登場したことを知ることができる。共伴遺物の質と副葬量から推し量ると首長層の墳墓であると認定され、韓国式銅劍文化が維持されるなかで、中国系遺物を威信財として取得したものと判断される。まだ袋壺と組合牛角形把手附壺、短頸壺などの古式瓦質土器が登場する前の段階に、威信財を持った集団との交流により取得されたものと判断される。

短頸壺は新技術である打捺技術が導入された器種で韓半島で初めて出現する。短頸壺の起源と関連して、星州礼山里3号墓短頸壺が注目される。早い段階の木棺墓で出土した短頸壺で、焼成状態は陶質に近い還元焰焼成で戦国系灰陶の技術的伝統を持ったものと評価される。このような打捺技術は中国系製陶術と関連があるものと考えられ、早くから研究が進められた。打捺技術の分析を通して木棺墓段階では縄（蓆）文打捺一色で、木槨墓段階では格子打捺が採択されるという基本的な認識がなされるようになった（李盛周2000）。このような打捺文の変化についての認識は中部地域の打捺文土器に連結し、中島式土器と共伴する格子・平行打捺文土器の存在により中島式土器の年代が後期瓦質土器が存続した時点まで下降する契機となったともいえる。最



図面 5. 瓦質土器編年案 (李盛周)

近では浦項地域で紀元後1世紀頃から格子打捺文が登場し、その後、慶山と慶州地域に拡大し、後期には慶州地域を中心に確認されるという見解がある（李ウオンテ2016）。縄（蓆）文打捺以後、格子打捺が登場するという部分では新しいことではないが、木棺墓段階から登場するという事実が注目される。しかし、昌原茶戸里40号と107号出土短頸壺では打捺技術は適用されないという場合もある。このような事例から在地技術と渡来技術が共存するなかで、匠人の選択によって技術採択がなされた可能性も考えることができる。一方、打捺文土器に残存する縄文打捺技術と関連し、最近樂浪系と韓半島系の区分が可能であるとみる見解があり注目される（古澤義久2016）。

金海良洞里162号・蔚山下垈44号など嶺南地方で木槨墓が築造されはじめ、古式瓦質土器文化が急速に衰退する。木槨墓の出現年代は2世紀後半とみる見解が優勢で、墓壇の規模が大きくなりながら土器・鉄器を中心に多くの量の遺物が副葬される。木棺墓造営はほとんど中止され、木棺墓段階の袋壺、組合牛角形把手附壺に大別された古式瓦質土器文化が終了し、台附広口壺、台附直口壺、爐形土器、高坏など新式瓦質土器文化が登場する。台附広口壺と爐形土器胴体部表面には鋸歯文・菱形文・縦集線文・格子文などの文様が施文される。青銅器は韓国式銅劍・漢鏡など青銅祭儀具が消え、倣製鏡と銅矛・銅鼎などに形式が変化し、鉄器副葬量も急増する。鉄器構成の変化も看取されるが、鉄劍は長身化し、無茎式鉄鏃が増加する。板状鉄斧は棒状鉄斧におきかわり、鉄矛は二段柄式鉄矛に転換し、有刺利器が新たに現れる。この中で鉄劍・棒状鉄斧・二段柄式鉄矛は3世紀前半になると環頭大刀・板状鉄斧形鉄鋌・関部突出形鉄矛に変化する。

一方、金海地域では弥生後期に該当する日本系遺物が移入されるのが特徴である。金海良洞里・内德里・七山洞・大成洞遺跡では日本系倣製鏡と中広形または広形銅矛が出土する。

3. 韓半島社会の変動と韓日交流の一側面

先に述べた三韓時代の考古学的資料を基に、弥生土器と三韓土器の暦年代を適用し、『三国志魏書東夷伝』に現れる記事を土台に韓・日交流の様相を検討しようと思う。

1) 秦開の東征

秦開は戦国時代燕国昭王代（BC311～279）の将軍で、東胡に人質としてとらわれていた。その後、脱出し、東胡を征伐して1千余里の領土を征服し、古朝鮮にも攻撃し、2千余里の領土を征服し、満潘汗を境界としたと伝える。これを契機に遼西地域の青銅器文化が遼東及び韓半島一円に波及したという見解がある（李陽洙2003）。鄭家窪子遺跡は二道河子・崗上墓・十二台營子に連なる遼寧式銅劍の最後の段階として秦開の東征で遼東地域まで押し寄せたものとみられる。鄭家窪子6512号墓の青銅器の組み合わせは多鈕雷紋鏡・遼寧式銅劍・円蓋形銅器・肩甲形銅器・喇叭形銅器で構成されているが、韓半島中西部地域の大田槐亭洞・牙山南城里・礼山東西里まで波及する。鄭家窪子青銅器文化の主体については濊貊族または古朝鮮の文化として遼東に起源があるとする立場と、東胡の文化として遼西に起源があるとする見解があるが、韓半島中西部地域まで出現する状況から推し量ると、古朝鮮系青銅器の組み合わせであると判断される。秦開の東進時点は紀元前4世紀後半から3世紀前半までの事件である。鄭家窪子の遼寧式銅劍・雷紋鏡という組み合わせと韓半島の韓国式銅劍・多鈕鏡という組み合わせは型式学的にみて、時間差を確然と反映したもので、鄭家窪子遺跡の年代より遅い時点とみななければならず、紀元前3世紀前半またはこれより遅く出現した可能性がある。一方、秦開の東征により遼寧一帯から韓半島西北部一円まで蓮花堡—細竹里類型と呼ばれる燕系鉄器文化が成立する。

粘土帯土器文化が外来系土器文化が土着していく基層文化として初期鉄器時代の間、継続して存続する。円形粘土帯土器の登場時点は‘国’に成立段階とみることはできないが、韓国式銅劍・多鈕粗文鏡など階層社会の構造を示している威信財が登場する時点から三韓の成立時点と判断することができる。従って、韓国式銅劍・多鈕粗文鏡をはじめ異形青銅器が韓半島に登場する時点は、先に指摘したとおり、紀元前3世紀前半とみることができる。以後、円形粘土帯土器文化は韓半島南海岸一帯に拡散し、異形青銅器の組み合わせは銅鈴類に転換し、湖南地域を中心に現れる。

2) 準王の南下

準王は古朝鮮の否王の息子であり、秦末期の混乱した時期（BC209～202）に王位についたものとみられる。このような混乱期に燕・斉・趙の流民が古朝鮮に流入したが、その中の一人が衛満である。準王は衛満に西辺を防御する任務を委ねたが、衛満

が逆に王儉城を攻撃し、準王を追い出した。この時が漢恵帝元年で、紀元前194年である。準王の南下記事が載っている『三国志魏書東夷伝韓条』には、「侯準が王を称したが、燕国の亡人衛満から攻撃を受け国を出た。左右の宮人を連れ、海を越え、韓に住み、自ら韓王と称した。その後、子孫は絶えてしまったが、韓には今なお彼の祭祀を行う人がいる。魏略が伝えるところでは、準の子息や親戚は国に残り、そのまま韓氏を姓として使った。準は海外で王となった後、朝鮮と相互往来することはなかった。」と記録されている。古朝鮮の都邑地と準王の南下地点が明確ではなく、現在まで論争があるが、朝鮮から海を越え、韓王と称したり、‘韓’というところは韓半島南部であるので、三韓前期文化の中心地である湖西・湖南地域とみるのが一般的である。現在までの発掘調査成果から推し量ると、馬韓地域内の先進地である完州（葛洞・新豊・徳洞）一帯の万頃江流域に南下し、拠点をつくり住んだ可能性が高い。最後の記事に言及されている“準王海中 不与朝鮮往来”という表現は二種類の解釈が可能である。‘準が船に乗り、海を越え、王と称し、朝鮮と往来しなかった’という解釈と‘準が海で囲まれたところで王と称し、朝鮮と往来しなかった’という解釈である。どちらの解釈が正しいかについての卓見はないが、まず準王一派の南下は海路を利用したことは明らかである。漢武帝が古朝鮮経略当時、水軍を朝鮮に派遣したが、敗北したという史記の記録から推し量ると、古朝鮮海軍の存在を想定することができる。従って、準王も相当な海上勢力を率いていたと推定することが可能である。準王一派は海を通して、南下しながら中西部地域・湖南地域を経て移動したのであり、あるいは北部九州まで到達した可能性も排除することができない。韓半島南部地域から日本まで移動がなされたとすれば、北部九州では板付Ⅱc式または城ノ越式段階に円形粘土帯土器・韓国式銅剣・多鈕細文鏡—鉄器文化が反映される理由が説明される。馬韓と日本の交流を想定してみる可能性もあるが、馬韓の物質文化に対応する倭系遺物がないことから移住の可能性が高いと判断される。準王一派が韓半島南部に移動しながら古朝鮮流移民集団は持続的に分離しながら、一部は馬韓地方に定着し、最終的には北部九州まで到達したものと考える。準王一派の移住は既存の在地人との妥協による定着可能性が高い。在地集団の粘土帯土器を受容し、先進集団は青銅器製作技術及び燕系鉄器文化を持ってきたものと判断される。韓半島西北地域では秦開の東征により既に燕系鉄器文化が形成されていた。直ちに韓半島に鉄器文化が波及したのではないという事実は燕国の意図的な鉄器流通統制があったものと考えられる。従って、韓半島における燕系鉄器の初現時点は燕国の鉄器流通統制システムが麻痺した時である。その契機は燕国が滅亡する紀元前221年を起点と考えることができる。『三国志魏書東夷伝韓条』によると、燕滅亡後、陳勝と項羽の蜂起により中国が混乱した時点で、燕・斉・趙の流移民が古朝鮮に流入し、準王は彼らを受け入れ、西方一帯に定着させた。従って、この時点を前後し、古朝鮮は戦国系鉄器製作技術を獲得したものと判断される。以後、衛満の攻奪により準王は馬韓地域に南下するようになり、これを契機に韓半島湖西・湖南地域では木棺墓群集が築かれ、鉄器が出現する。

以後、馬韓地域で繁栄した韓国式銅剣文化が急速に衰退する現象が看取される。‘準

王一派が絶えた’という記事からみて準王一派は完州一帯に留まったが、没落したのである。

3) 歴谿卿の南下

『三国志魏書東夷伝韓条』に登場する歴谿卿の南下は辰韓地域で、南下時点を前後し、物質文化の変化が感知される。朝鮮相歴谿卿は古朝鮮の高位職であると推定され、衛満の孫である右渠王との葛藤により、2000余戸を率いて辰国に南下したと伝える。この時点は右渠王と漢武帝間の戦争が勃発する以前（BC108）で、紀元前2世紀後葉と判断される。先に指摘したとおり準王一派は古朝鮮系青銅器と燕系鉄器技術を持っていることは明らかである。歴谿卿一派も古朝鮮系青銅器製作技術と燕系鉄器技術を持っており、これとともに漢系遺物も所持していたのである。ところで、偶然にも歴谿卿の南下時点を前後し、三韓文化の中心地が湖南地方から嶺南地方に変化する。これをみて、準王一派が嶺南地域に移動したという見解も出た。準王一派が完州一帯（葛洞・新豊・徳洞）に留まったが、大邱・慶山一帯に移動し、嶺南地方瓦質土器文化が始まり、この移動の余波で粘土帯土器・韓国式銅剣・多鈕細文鏡が北部九州に押し寄せたとみた（申敬澈2013）。これとともに、湖南地域の鉄器文化が嶺南地域に移動したという見解もあるが、申敬澈と同じ論理である（金想民2013）。嶺南地方の三角形粘土帯土器と韓国式銅剣・銅矛・銅戈などの遺物の組み合わせは湖南地域の様相と類似し、戦国系鉄器も現われる。しかし、馬韓と弁辰韓地域の考古資料ではいくつか差異点が看取される。まず、馬韓支配集団の主要威信財である多鈕細文鏡が嶺南地方ではほとんど出土しない。また、嶺南地方では粘土帯土器文化が日常土器文化として維持される中で、新たな瓦質土器文化が展開する。馬韓地域では瓦質土器が全く現われず、打捺技術・室窯など新たな土器製作技術を持っていたとはいえない。弁辰韓地域で戦国系鉄器が確認されるが、環頭小刀・鋤形鉄器・板状鉄器のように馬韓地域で確認されない戦国系鉄器も確認される。鉄剣・鉄矛・鑄造鉄斧・鍛造鉄斧が新たに登場し、漢鏡・帯鉤・弩機など漢式青銅器が確認される点も異なる。また、準王一派の辰韓移動により粘土帯土器文化と鉄器文化が日本に波及したということは弥生年代観とも合わない。北部九州で円形粘土帯土器をはじめとし、多鈕細文鏡・韓国式銅剣・銅矛・銅戈と鉄器は板付Ⅱc式または城ノ越式段階から登場する（武末純一2013）。最後に完州一帯の穀倉地帯と海が隣接した湖南地方から瘦せた嶺南地方山間内陸に移動する動機と経路が不分明である。従って、完州一帯の三韓文化が断絶したという事実は準王一派の衰退を意味し、これは三国志魏書東夷伝に記録されたことのとおりである。新たな製陶術と鉄器技術、中国系威信財を所持する程度の移住民集団は衛満朝鮮支配集団で、古朝鮮—漢との戦争以前に辰韓地域に移動したものである。古朝鮮—漢との戦争以後、古朝鮮の流民が南下した可能性もあるが、辰韓地域で出現する威信財の所持が可能な階層でなければならない。古朝鮮は支配層の内紛が最も大きな崩壊原因であった。古朝鮮の支配層は戦争以後、漢に協力し、権力を強固にしていたので、戦争以降に支配層の南下を想定することも理にあわない。

従って、歴谿卿一派が辰弁韓地域に移住し、新たな製陶術と戦国系鉄器が登場し、移住民の立場から在地民との摩擦を減らしながら、辰弁韓の土着民と同化していったものと判断される。『三国史記』第1巻始祖赫居世居西干条には「これより先に朝鮮流民が山と谷の間に暮らし、これが六村となった。一つは閼川楊山村で…」という記事が確認されるが、ここで言及された朝鮮移民は歴谿卿一派であると判断される。

4) 靺島交易の成立と衰退

韓国南海岸一帯で三角形粘土帯土器と共伴する中期弥生土器が泗川及び金海地域で出土する現象は先に述べたとおりである。韓半島東南海岸と北部九州交易が活発になされた弥生時代中期は紀元前2世紀～紀元前後までである。先に指摘したとおり準王の南下が起きた紀元前2世紀前半から北部九州地域では韓半島と交流を示唆する資料が多い。もちろん前期に該当する弥生土器が韓半島南海岸で発見されるため、それ以前から交流がなされた事実は明らかだが、移住が反映された交流が確実なのは弥生中期からである。また、準王の南下は古朝鮮人の移住を反映し、海上集団である準王一派は西海—南海—北部九州を結ぶルートを完成させたと判断される。しかし準王の南下は、交流ではない移住が目的で、両方向の交易は想定しがたいと判断される。西北韓及び西海岸一帯では日本系資料が確認されないためである。韓半島西海—南海岸一帯は準王の南下を容認する程度に在地民の反発が大きくなり、海南—泗川—金海—釜山—蔚山など海に接した中継地は交易を媒介に発展したのである。自由な交易雰囲気では弥生人は主体的に韓半島南海岸一帯で移住を反映した交易を行うことができ、南海岸一帯に位置する中継拠点は特定政治体に隷属しない在地民により主導される海村のような形態であったと判断される（武末純一2016）。このような海上交易の中継地として靺島が脚光を浴びるが、紀元前後の時点から変化が感知される。

嶺南地方では後期弥生土器が急減するなど韓日関係の変化が現われる。これと関連し、弥生人の移住が中断したり、移住が不必要な交易方式に変化するという見解もある（イェ・ジウン2011）。このような交易方式の変化からみる見解に同意し、変化の背景には辰弁韓地域の政治体の発展と密接に関連があるものと判断する。辰弁韓集団の規模が大きくなり、臣智の権力が強化されながら、海上交易統制を示導する時点であると考えられる。この時点を前後し、泗川靺島の交易体系が漸次衰退し、自由な交易を行った弥生人の交易回数が減少し、古式瓦質土器段階には日本系資料が減ったものと判断される。中部地域や南部内陸地域への移動経路を拡大してみても交易の形態は過去よりもかなり縮小した形態であったのである。

5) 金海交易の成立

新式瓦質土器段階に入ると、金海地域では倣製鏡と中広形銅矛のような日本系威信財が登場し、日本の原の辻遺跡でも棒状鉄斧など辰弁韓地域に特徴的な鉄器が出土するなど金海地域を中心に韓日交易が再開するものと判断される。しかし、移住を想定することができる集落遺跡が確認されず、倣の威信財と辰弁韓の鉄の交換形態を想定して

表 3. 韓国—中国—日本 対外関係主要事件

西暦	事件	弥生時代 暦年代	初期鉄器— 原三国時代 暦年代
403	戦国時代		
BC 300	311~279 秦開の古朝鮮遠征	前期	円形 粘土帯土器 (水石里式)
221	秦 全国統一 古朝鮮 否王 即位	中期	三角形 粘土帯土器 (勒島式)
209~202	陳勝吳広起義 前漢 成立 古朝鮮 準王 即位 燕, 斉, 趙 遺民 古朝鮮 移住		
194	衛満 古朝鮮 攻撃(衛満朝鮮 成立) 準王 南下(馬韓地方 移住 推定)		
119	五銖錢 鋳造 開始 朝鮮相 歴谿卿 一派の南下	後期	古式 瓦質土器
108	衛満朝鮮 滅亡 漢四郡 設置(楽浪, 臨屯, 真番, 玄菟) 衛満朝鮮 遺民 離脱		
57	新羅 建国	古墳時代	陶質土器
37	高句麗 建国		
18	百濟 建国		
8	王莽 新 建国 加耶 建国		
20	貨泉 鋳造		
25	光武帝 後漢 成立		
100		後期	新式 瓦質土器
147~189	桓靈之末(桓帝, 靈帝 年間): 韓, 滅 強盛 → 中原 遺民 離脱		
196~219	公孫康 帯方郡設置: (楽浪郡) 屯有県以南に帯方郡新設		
237~247	楽浪太守 鮮于嗣 → 劉茂 帯方太守 劉昕 → 劉夏 → 弓遵 → 王頌		
AD 300	313 楽浪郡 滅亡: 高句麗 美川王		

みると、この時からの交易は国家支配層主導で行われる朝貢貿易の形態であるとみななければならないのではないかと考えられる。3世紀頃になると、楽浪郡が再整備されて帯方郡が設置され、3世紀中葉になると、帯方郡を主軸に日本と中国間の直接的な朝貢貿易がなされたという記録も確認される。日本から帯方郡に移動するためには中間寄着地が必要で、このような中継地として金海が脚光を浴びたのである。韓国にいる大部分の研究者は三国志魏書東夷伝に登場する‘国出鉄’交易記事の主たる舞台を泗川勒島であると想定している。しかし泗川勒島で行われた国際交易は弥生人の移住が可能な自由な交易がなされた時点のことで、金海—釜山—蔚山などさまざまな地域を移動しながら交易を行ったのである。中国系資料も一部存在するが、積極的な対中交易の痕跡を探し出すことができない。また、‘国出鉄’記事に登場する2郡は楽浪郡と帯方郡を指しており、帯方郡が成立した時点である3世紀以後の事実とみなしなければならない。この時点を前後し、韓半島南部で日本系威信財と中国系威信財が同時に確認される地

域が金海である。3世紀代の国際交易の中心地であると同時に‘国出鉄’記事に登場する主たる舞台は弁韓の金海であるとみなければならぬのではないかと考えてみた。

4. おわりに

韓半島土器資料を中心に三韓社会の物質文化の変動を検討し、弥生暦年代観及び三韓時代暦年代観に合わせた考古学界の一般的な相対編年案と『三国志魏書東夷伝』韓日関連記事の年代を対比させてみた。韓半島物質文化の変動の原因を歴史的な事実求め、東アジア社会の国際的な移住と交流の様相を明らかにした。本稿を作成しながら、嶺南地方と北部九州の三韓時代の交流について考古学的な研究水準がとて深化し、完成段階に至っているという点を今更ながら理解した。筆者の力量が足りず新しい研究結果を導き出したという自信がないが、考古学的な研究成果を基に文献資料を引き出し韓日交流及び社会相を再構成してみようと考えた。史料を中心に資料を解釈する方法は考古学研究者にとっては禁忌視されるが、考古学者の立場から歴史的事実を対比させてみる作業はとて興味深いこと以外の何物でもない。樂浪郡設置を起点に三韓社会の成立を主張した過去の解釈または通説とは異なる内容が多く、仮説的な部分も含まれており、痛烈な批判が予想される。しかし、論争があったとしても私案は積極的に持ち出して討論を通して新たな研究に続く土台を作ることが、個人と学問の発展に寄与するのではないかと考えてみた。十分な分析資料を入れることができなかった部分が物足りないが、これは今後の研究課題としたいと思う。おわりにシンポジウム開催に尽力された長崎県埋蔵文化財センター側と今回の発表のために多くのご助言とご助力をいただいた朴辰一、古澤義久先生、そして、資料提供にご協力いただいた国立中央博物館、国立慶州博物館、国立大邱博物館、国立金海博物館、蔚山文化財研究院、東義大学校博物館、福泉博物館の関係者の方々に感謝申しあげる。

参考文献

- 古澤義久, 2016, 「大陸・半島系土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県教育委員会
- 宮里修, 2010, 『한반도 청동기의 기원과 전개』, 사회평론
- 김상민, 2013, 「한반도 남부지역 철기문화의 유입과 전개과정」, 『동아시아 고대 철기문화연구』, 국립문화재연구소
- 武末純一, 2012, 「原三國時代 年代論の諸問題 -北部九州の資料を中心に-」, 『原三國三國時代 歴年代論』, 학연문화사
- , 2013, 「일본의 전국계 또는 전환대 관련 철기의 시기 비정 문제」, 『동아시아 고대 철기문화연구』, 국립문화재연구소
- , 2016, 「原の辻の對外交渉」, 『늑도와 하루노쓰지를 통해 본 동아시아 교류의 양상』, 국립진주박물관
- 朴辰一, 2013, 『韓半島 粘土帶土器文化 研究』, 釜山大學校 博士學位論文
- 신경철, 2013, 「삼한시대 문화와 울산」, 『三韓時代 문화와蔚山』, 蔚山文化財研究院
- 申東昭, 2007, 『嶺南地方 原三國時代 鐵斧와 鐵矛의 分布定型 研究』, 慶北大學校 碩士

學位論文

- 영남고고학회, 2015, 『영남의 고고학』, 사회평론
- 예지은, 2011, 『韓半島 出土 彌生系土器의 研究』, 嶺南大學校 碩士學位論文
- 李盛周, 2000, 「打捺文土器의 展開와 陶質土器 發生」, 『韓國考古學報』 42, 韓國考古學會
- , 2005, 「嶺南地方 原三國時代 土器」, 『원삼국시대 문화의 지역성과 변동』, 제 29회 한국고고학전국대회
- 李陽洙, 2003, 「支石墓社會에서 木棺墓社會로」, 『弁辰韓의 黎明』, 國立金海博物館
- 이원태, 2016, 「영남지방에서 격자문 전기와질토기의 등장과 전개」, 『嶺南考古學』 74, 嶺南考古學會
- 이창희, 2015, 「늑도교역론」, 『嶺南考古學』 73, 嶺南考古學會
- 鄭仁盛, 2008, 「瓦質土器 樂浪影響說의 검토」, 『嶺南考古學』 47, 嶺南考古學會
- , 2012, 「瓦質土器의 出現과 歷年代 再論」, 『原三國·三國時代 歷年代論』, 학연문화사
- 한국고고학회, 2010, 『한국고고학강의』, 사회평론

(翻譯：長崎県埋藏文化財センター 古澤義久)

弥生時代の日韓交流

福岡大学 武末 純一

1. はじめに

今回は弥生時代の日韓交流を、弥生時代前半期新段階(前期末～中期前半)と弥生時代後半期(中期後半～後期)に大別して述べる。それぞれ国の形成と渡来粘土帯土器人集団が果たした役割、海村と硯・権・中国銭貨からみた文字の使用に焦点を絞る。

2. 国の形成

弥生時代には、『漢書』地理志の「楽浪の海中に倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来たり献見すという」の一文からも国が存在した。これは紀元前1世紀の記録で、弥生時代中期後半に当たる。しかし考古資料でみると、北部九州での国の成立はさらに古くなる。

地域内の階層構造の在り方は、国の形成度に連動し、国形成の進展度の目安になる。とくに墓地の様相や青銅器の保有相は、階層構造を敏感に反映する。これらの青銅武器は韓半島では、北韓の平壤市貞栢洞1号墓で「夫租薺君(夫租という地域の濊族の政治的首長)」銀印に銅剣と銅矛が伴うため、首長層の権威を示す政治的な聖なる器物である。この取り扱いには北部九州でもそのまま再現され、その性格も引き継がれた。

福岡市の早良平野では、この時期の青銅器は圧倒的に吉武遺跡に集中する。ほかの拠点遺跡では1～2本で、銅矛や多鈕細文鏡は持てず、それらの周辺には青銅器を持ってない小集落がある。したがって早良平野ではこの時期に、吉武を頂点とした階層構造がみられ、国という政治組織ができた。吉武の居住域は10万㎡を超えて、村全体をまとめる大型建物は床面積が115.2㎡になるが、東入部の居住域は2万㎡ほどで大型建物の床面積が50㎡ほどである点も、階層構造を示す。原の辻遺跡では中期前半に2条の環溝が約24万㎡を囲み、大原地区にこの時期の細形青銅器類が集中するから、この時期に一支国ができ、原の辻が国邑になった。

この時期には各単位地域(国)に一つずつ、韓半島系の青銅器を集中的にもつ遺跡がみられ、それら青銅器の質と量は大同小異で優劣の差はないから、『漢書』の百余国体制は、この時期まで遡る。また、佐賀平野産の三条節帯銅矛の分布からみて、国々の連合体であるツクシ政権も形成され始めた。

この時期の特色に、韓半島南部から渡来した粘土帯土器人の集住がある。粘土帯土器は前半の円形粘土帯土器の水石里式と後半の三角形粘土帯土器の勒島式があって、水石里式系が多く、拠点集落の周縁部に渡来粘土帯土器人集団の居住区ができる。そのありかたは、福岡市諸岡遺跡のように擬粘土帯(擬水石里式)土器がなく一時的な居住とみられる諸岡型と、佐賀県土生遺跡のように前期末～中期前半の弥生土器とともに少量の粘土帯(水石里式)土器と多くの擬粘土帯(擬水石里式)土器が出て、この地に長く居住し、地域社会に深く入り込みながら同化する過程を示す土生型がある。

原の辻遺跡は土生型だが、水石里式と勒島式が共に多く、擬水石里式土器と擬勒島式土

器もみられる。これは、粘土帯土器人が継続的に渡来・居住して、故地との交流回路を開設・維持した証である。居住地区は環溝の外、台地北西側の縁辺部で集落の周縁部にあたり、環溝内の中心部ではない。付近には中期前半の船着場がある。中心から制御されつつも、中心に入れば失う自由は確保して、韓半島系の工法で港の建設を指導し、国の交易に参画して、周縁からも中心を制御する形で国づくりを促進したとみる。また、近年では、楽浪土器より前の中国東北地域との交流が問題になった。原の辻遺跡の城ノ越式のトンボ玉や、城ノ越～須玖 I 式の三翼銅鏃はこれを後押しする。

3. 海村と文字の使用

(1) 王墓の出現

弥生時代後半期には、ツクシ政権内部で伊都国と奴国が台頭してほかの国々の上に立ち、王が現れる。また、中期後半の各国の王墓を含めた首長層墓の副葬品は、前漢鏡やガラス璧などの中国系が主流になる。ツクシ政権の首長層の權威の拠り所が古朝鮮から前漢に変化し、後期には後漢に引き継がれた。その他の諸国で前漢鏡を持つ中心主体も王墓でよいから、大川地区を中心に前漢～後漢の中国鏡が出土する原の辻遺跡は、後半期にも国邑の座を維持した。

(2) 海村の設定

弥生時代には漁村と山村ができ、漁村の中からは海上交易活動を主体とする海村も現れた。海村や漁村・山村を抽出する目安は、石庖丁の数量である。福岡県糸島市御床松原遺跡は漁具が卓越し、石庖丁の数量(12点)は、同時期の農村である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量(63点)のおよそ5分の1で、農作業の比率もその程度であった。したがって、御床松原遺跡のように、周囲の遺跡よりも漁具の比率が高くて海上交易品が出る沿岸部の漁村は、海村と見てよい。地理環境や『魏志』倭人伝の「南北市糶」の記述から見て海上交易活動の比率が高い対馬でも、これまで石庖丁はほとんどなく、島全体が海村で占められた。壱岐では原の辻遺跡とカラカミ遺跡が代表例である。これらの海村は原の辻遺跡を除いて、国邑よりもはるかに小さい。

(3) 中国銭貨と文字使用

弥生時代の文字使用の本格的な考古学研究は、弥生中期後半併行の韓国慶尚南道昌原市茶戸里1号墓から出た5点の筆を筆記用とする李健茂氏の論が契機で、中国銭貨、楽浪土器、天秤権や棹秤権を検討してきた。茶戸里遺跡の出土遺物から、三韓と倭の交易での文字使用が提起されるからである。

楽浪土器 かつて私は、日本列島の楽浪土器を、1遺跡に1～2点程度の対馬型、3点以上だが遺跡全体に散漫に分布する原の辻型、遺跡内の一区画に集中する三雲番上型の三つに分けた。対馬は韓半島南部と日常的に交流し、対外交渉の基層をなした。原の辻遺跡では中期後半から古墳時代前期前半まで楽浪土器の流入が継続する。炊事用の滑石混入土器が一定量みられるから、楽浪人の滞在が考えられる。原の辻型は海村の一つの特徴で、海村世界での交易は対外交渉の中層をなす。番上型では伊都国の国邑中央部の狭い範囲から集中出土しセットがそろってから、ツクシ政権の対外交渉での最上層の様相と楽浪

人の居住を示す。楽浪土器は、対馬島を除けば、もっぱら日常生活域から出土する。国邑で完形中国鏡が首長層の墓に副葬されるのとは著しい対照をなし、取り扱いが異なる。楽浪土器のうち、半球形の鉢は、Ⅰ類の靉島遺跡例から変化し、Ⅱ類は丈が高くなって底部が小さく、内面には縦方向の直線的な暗文を全面に施す。Ⅲ類は日本列島で最も多くみられ、Ⅱ類より口が小さくなるため底部の比率がかなり大きくなる。口縁断面は三角形、内面の暗文は集線となり、原の辻遺跡でも、このⅢ類が多い。弥生時代終末期～古墳時代初頭のⅣ類は小型化して直口もあり、帯方郡の土器の可能性もある。

中国銭貨 半兩銭、五銖銭、貨泉などの中国銭貨は、海村の生活域から4点以上が出る。ほかに海辺の岡山県高塚遺跡で貨泉25点、大阪府亀井遺跡で貨泉4点が知られた。国邑級の集落では、完形中国鏡の場合と異なり、中国銭貨をほとんど保有しない。海村の中国銭貨は生活域から出て生業に関わるから、海上交易活動での対価に用いられた。中国銭貨の弥生青銅器原料説も根強いが、多数の鋳型や鋳造関連資料が出た須玖、唐古・鍵、比恵・那珂では中国銭貨はほとんど出ない。日常生活域での確実な祭祀埋納例もほとんどない。後漢の五銖銭が中国や楽浪では流通するのに、日本にあまりないことを問題視する意見もあるが、韓半島南部も貨泉が卓越し、日本列島のみの現象ではない。最近では、中国本土での後漢の銭貨も、墳墓では後漢の五銖銭が多いが、穴蔵に埋蔵した窖蔵銭は貨泉が主体で、貨泉の価値が下落したために窖蔵された貨泉は中国本土で使われず、韓半島南部から日本列島へ流入したとされる。

山口県沖ノ山の甕の模造品での実験では、中国銭貨を痕跡の上面まで満たすには500枚以上必要との結論が得られた。韓国でも全羅南道海岸部の巨文島では980枚が採集され、仁川市雲北洞遺跡では五銖銭18点が紐に通した状態で出た。光州市伏龍洞遺跡2区域1号土壙墓でも、貨泉50余点が紐に通した縉銭の状態が出た。中世の銭貨流通の研究では、個別発見貨が目され、流通の度合いは、もっとも盛んなレベルⅠ、一定量流通するが限定的なレベルⅡ、ほとんど流通しないレベルⅢの地域に分ける。日韓の中国銭貨はレベルⅡに相当し、レベルⅡの地域で中国銭貨は他の用途にも使われた。

同じ中国製品でも中国鏡の場合は、完形品が国邑に集中し、海村では破鏡である。国邑は政治権力で国の中の周縁にある海村を制御するが、各地域の海村は、独自の世界を形成して、交易活動では逆に国邑を制御した。原の辻遺跡は、国邑と海村の二つの性格を併せ持つ特異な遺跡である。

天秤権と棹秤権 原の辻で出た青銅製の棹秤権は、弥生時代後期に属する可能性が高いとされた。青谷上寺地遺跡の銅鐸形石製品と報告された3点も石製棹秤権である。亀井遺跡の石製天秤権は11点で、2の累乗倍の重さを持ち、本来は2組であった。佐賀県鳥栖市本行遺跡Ⅱ区65号土坑では、後期前半が主体の土器群と共に、亀井遺跡と同様なつくりの石権が2点出た。亀井遺跡の天秤権は4点の貨泉と関連する可能性がある。北部九州の棹秤権は他にも類例があって、石製・土製ともに吊り下げ部分だけでなく、鈕と体部の縦横にも紐ズレ痕が残り、破損防止のために紐で縛った。権は海村だけでなく、拠点集落での計量にも使用されたが、交易の場での使用頻度が高いと考える。

硯 漢代の墨は顆粒状で、板状の石硯の上に置いて上から小さな正方形の板石(研石)で磨り潰す。ここでは各遺跡から出た石硯や研石を、各遺跡名を付けて〇〇硯と呼ぶ。番上硯は、三雲・井原遺跡番上地区の土器溜りの最上層(黒褐土層)から2015年12月2日に出た。時期は弥生時代後期末以前である。金雲母様の粒子を含んで層理がある黒灰色の砂質片岩製の破片で、側面は一部分のみ残る。現存長6.0cm、現存幅4.3cm、厚さ0.6cmで上面はよく研磨され、下面は割ったままである。側面は上半部が上面側に内傾して下半部は垂長に近く、別々に横研磨する。番上硯と比較対照した資料は、島根県松江市の田和山硯、楽浪王盱墓硯、東京国立博物館小倉コレクションの(伝)楽浪硯と勒島硯である。楽浪で使用された石硯・研石自体のつくりには以下の特徴がある。

- (1) 石材は層理がある砂質片岩とみられ、金雲母様の粒子を多く含み、黒灰色。
- (2) 石硯は長方形板状で、上面は研磨して平滑だが、下面は割ったままで研磨しない。研石も板状の場合、下面は平滑だが上面は粗雑である。
- (3) 側面は、扁平な板石を半分擦り切って割り取るため、原則的に上下面に垂直ではなく、どちらかの面に内傾し、横研磨が2回みられ、時に破面がそのまま残る。

番上硯は、そこに居住した渡来楽浪人が文書を作成し外交交渉に携わったという推測を裏付ける。また、日韓の海村で交易に文字使用した可能性が高まった。

4. 韓半島の倭系資料

現在、韓半島の弥生系土器は泗川圏域と金海圏域、蔚山圏域の3地域に主に分布する。泗川圏域の勒島遺跡は対外交渉の重要な結節点で、中国東北地域や楽浪郡の交易網とも結びつき、石硯や石製・鉄製の棹秤権もある。ただし、韓半島での弥生社会との交渉の中心は、一貫して金海地域であった。昌原茶戸里遺跡や金海良洞里遺跡の原三国時代の土器や鉄器は、壱岐・対馬や北部九州を中心に西日本で出る弥生時代後半期(弥生中期後半から後期)の韓半島系の土器・鉄器と共通する。

弥生時代の韓半島と日本列島の相互交渉の目的の一つは、「弁辰の鉄」であった。それは日本列島側だけの都合ではなく、韓半島南部の販路拡大戦略の一環でもあった。

5. おわりに

弥生時代後半期の対外交渉は、3層を成して進行した。原の辻遺跡はその中で、国邑であり海村でもあるという特異な様相を見せ、海村交易世界の大きな結節点であった。

【引用・参考文献】

< 日文 >

- 小田富士雄 1982 「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」『古文化談叢』第9集
古賀信幸・豆谷和之 1995 「山口県宇部市沖ノ山発見の銭貨資料」『出土銭貨』第3号
佐藤大樹 2015 「東アジアの中の貨泉」『駒澤考古』第40号
志摩町教育委員会 1983 『御床松原遺跡』(志摩町文化財調査報告書第3集)
志摩町教育委員会 1987 『新町遺跡』(志摩町文化財調査報告書第7集)
志摩町教育委員会 1988 『新町遺跡Ⅱ』(志摩町文化財調査報告書第8集)
武末純一 2002 『弥生の村』日本史リブレット3(山川出版社)

- 武末純一 2008「茶戸里遺跡と日本」『昌原茶戸里遺跡の発掘成果と課題』（昌原茶戸里遺跡発掘 20 周年 国際学術シンポジウム）国立中央博物館
- 武末純一 2009「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集
- 武末純一 2013a「金海会峴里貝塚出土の弥生系土器」『朝鮮学報』第 288 輯
- 武末純一 2013b「弥生時代の権—青谷上寺地遺跡例を中心に—」『福岡大学考古学論集』2
- 武末純一 2015「3 世紀の列島内外の交流とツクシ」『大集結 弥生時代のクニグニ』（青垣出版）
- 武末純一 2016「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纏向発見と邪馬台国の全貌』（角川文化振興財団）
- 武末純一・平尾和久 2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』第 76 集
- 辻川哲朗 2015「丹後・古殿遺跡出土「鐙型土製品」の再検討」『同志社大学考古学シリーズ X I 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』
- 長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡 総集編 I』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 30 集）
- 長崎県埋蔵文化財センター 2015『平成 27 年度東アジア国際シンポジウム ロード・オブ・ザ・コイン—弥生時代中国貨幣から見る交流—』
- 福岡県教育委員会 1985『三雲遺蹟 南小路地区編』（福岡県文化財調査報告書第 69 集）
- 福岡市教育委員会 2014『比恵 66—比恵遺跡群第 125 次調査の報告—』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1237 集）
- 町田章 1998「三雲遺跡の金銅四葉座金具について」『古文化談叢』第 20 集（上）
- 松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告 1 田和山遺跡』（松江市文化財調査報告書第 99 集）
- 三宅俊彦 2008「金代・北東アジアの銭貨流通」『アジア遊学』107 勉誠出版
- 森本幹彦 2008「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡」『嶺南考古学会・九州考古学会第 8 回合同考古学会 日韓交流の考古学』
- 森本幹彦 2015「外来系土器から見た対外交流の様相」『古代文化』第 66 巻第 4 号
- 森本晋 2012「弥生時代の分銅」『考古学研究』第 59 巻 3 号（通巻 235 号）
- 輪内瞭 2016「弥生時代の権衡—九州の進出資料を中心に—」『古文化談叢』第 76 集
〈韓文〉
- 金京七 2007「南韓出土漢代金属貨幣とその性格」『湖南考古学報』第 27 輯
- 国立慶州博物館 2007『永川龍田里遺蹟』（国立慶州博物館学術調査報告第 19 冊）
- 国立中央博物館 2012『昌原茶戸里』（国立中央博物館古蹟調査報告第 41 冊）
- 国立晋州博物館 2016『国際貿易港勒島と原の辻』四川勒島遺跡発掘 30 周年記念特別展
- 国立晋州博物館 2016『勒島と原の辻を通じてみた東アジア交流の様相』特別展〈国際貿易港勒島と原の辻〉連携学術シンポジウム
- 国立金海博物館 2014『金海会峴里貝塚』（国立金海博物館学術調査報告第 13 冊）
- 三江文化財研究院 2009『金海會峴里貝塚』I・II
- 李健茂 1992「茶戸里出土の筆について」『考古学誌』第 4 輯（韓国考古美術研究所）
- 李昌熙 2007「勒島住居址の一断面」『第 17 回考古学国際交流研究会 韓国の最新発掘調査報告会』（（財）大阪文化財センター）
- 李昌熙 2011「土器から見た加耶成立以前の韓日交流」『加耶の浦口と海上交流』（周留城）

李東注 2004 「泗川靑島 C 地区の調査成果」『嶺南考古学 20 年の歩み』（嶺南考古学会第 13 回定期学術発表会）

池健吉 1990 「南海岸地方漢代貨幣」『昌山金正基博士華甲記念論叢』

漢江文化財研究院 2010 『仁川雲北洞遺蹟 調査概要』

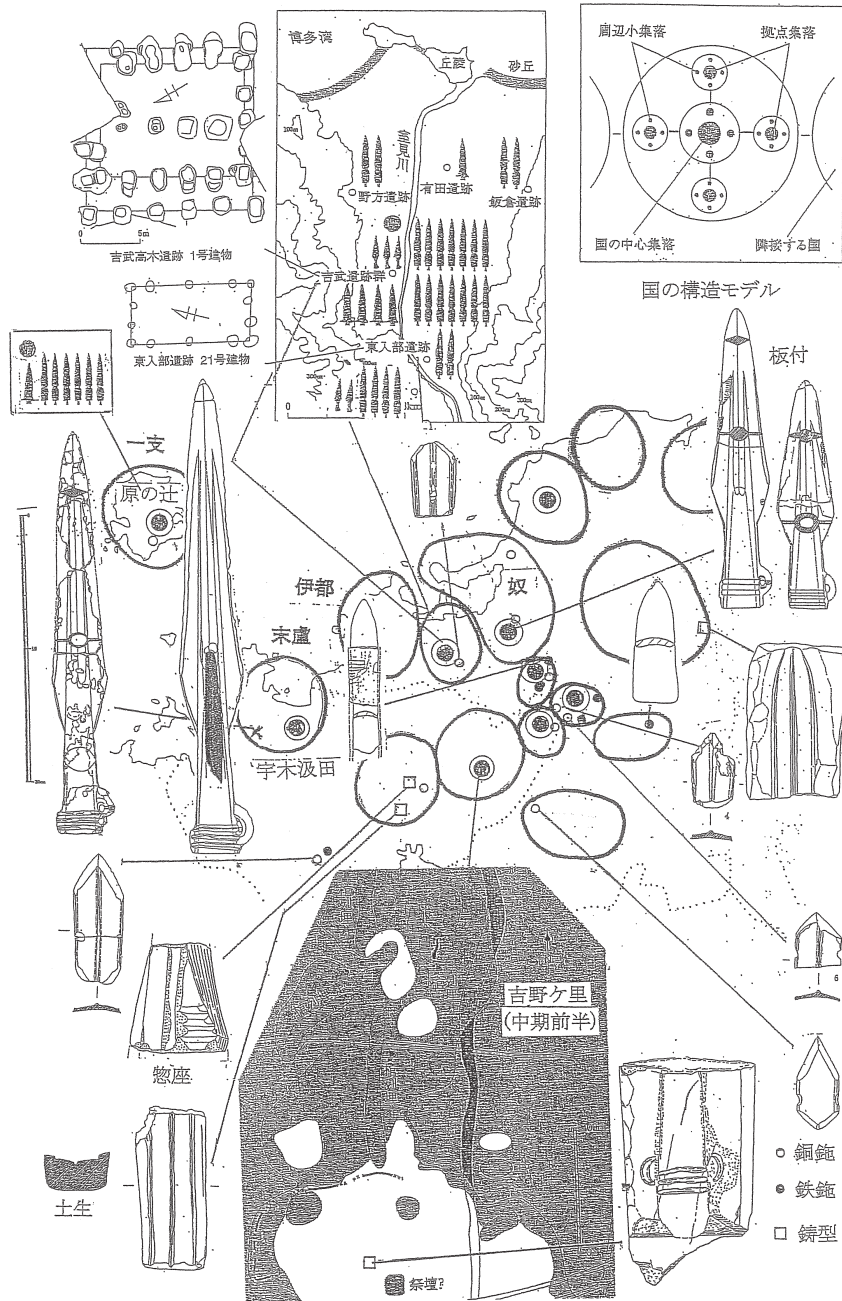


図2 弥生時代前半期新段階の国と中心集落

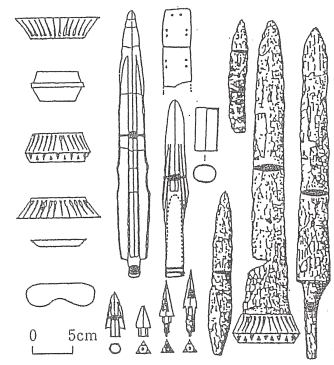
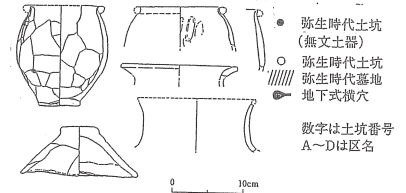
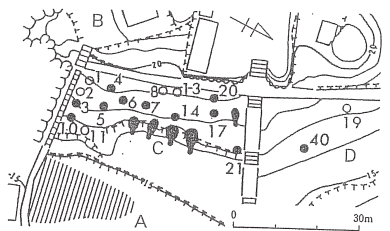
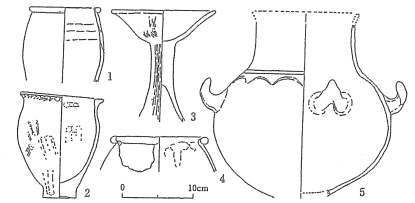


図1 貞栢洞1号墓の遺物



[1] 諸岡遺跡(上)と粘土帯土器(下)



[2] 土生遺跡の粘土帯土器(4)・擬粘土帯土器(1~3・5)

図3 北部九州の粘土帯系土器

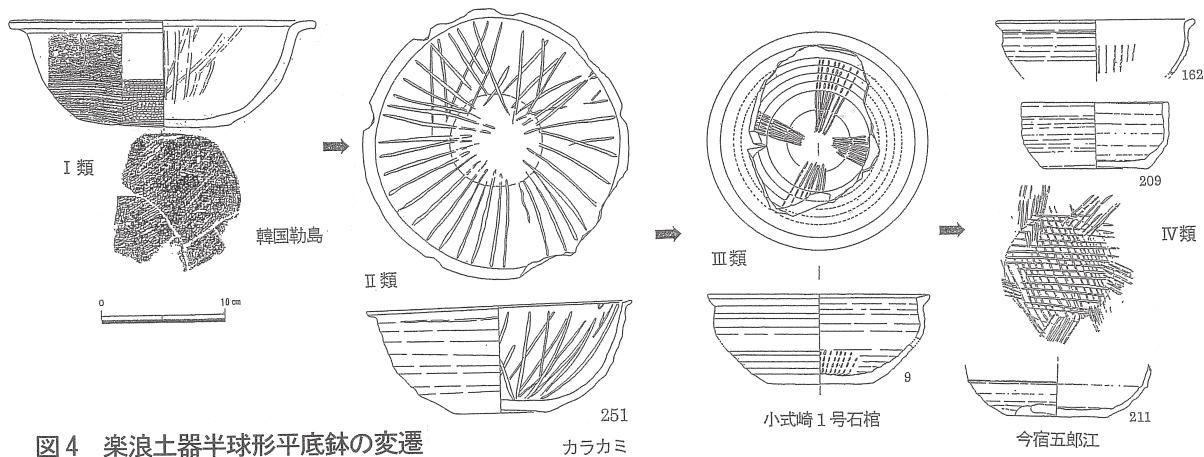


図4 楽浪土器半球形平底鉢の変遷

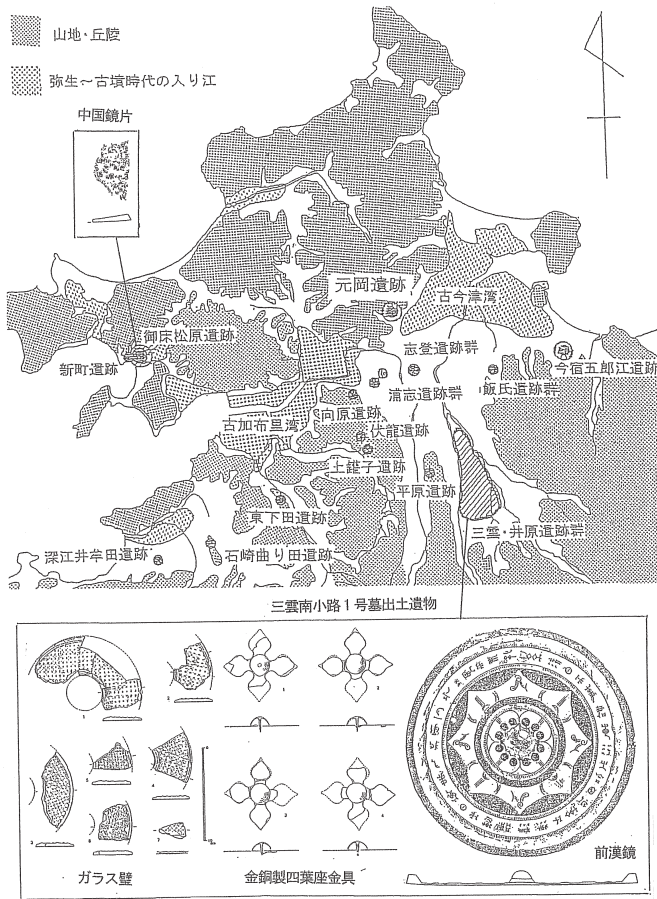


図5 伊都国の国邑と海村

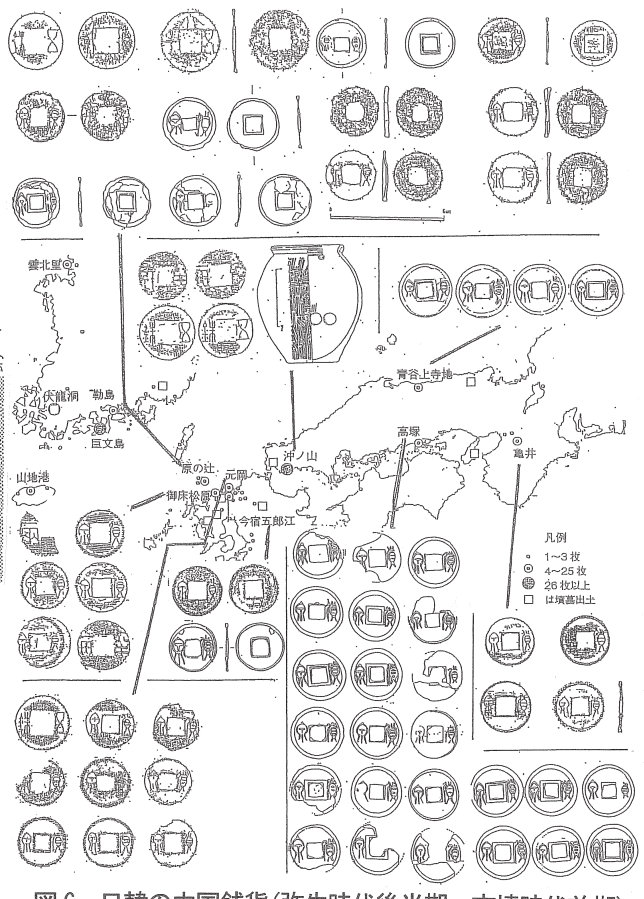
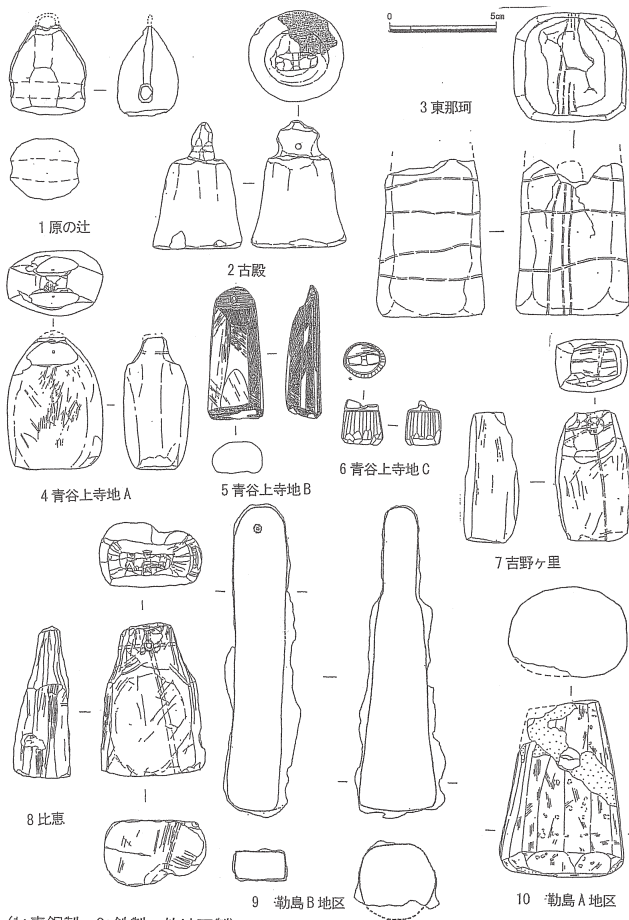


図6 日韓の中国銭貨(弥生時代後半期～古墳時代前期)



(1:青銅製、9:鉄製、他は石製)

図7 日韓の棹秤權

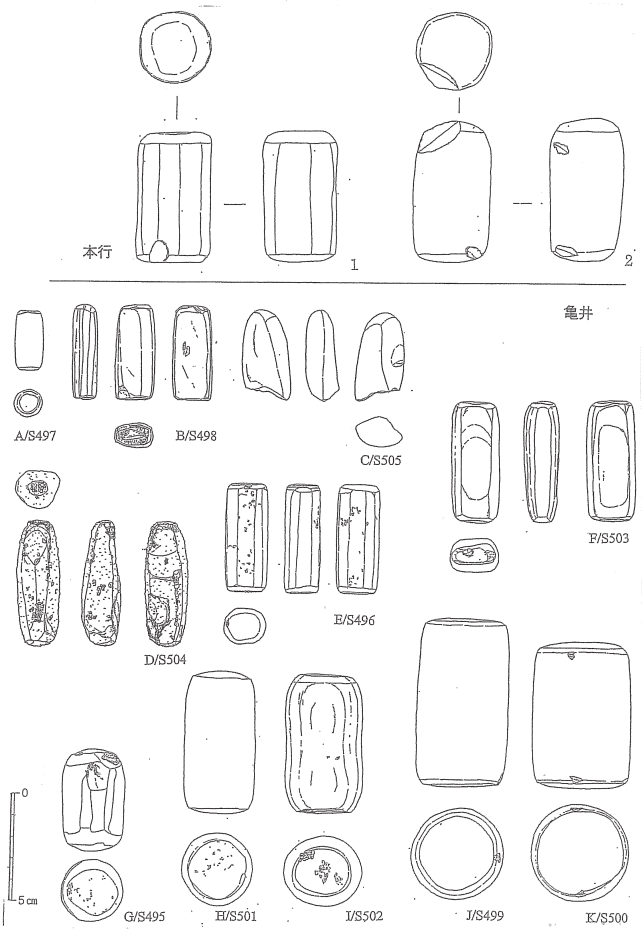


図8 本行遺跡(1・2)と亀井遺跡の石製天秤權(A～K)

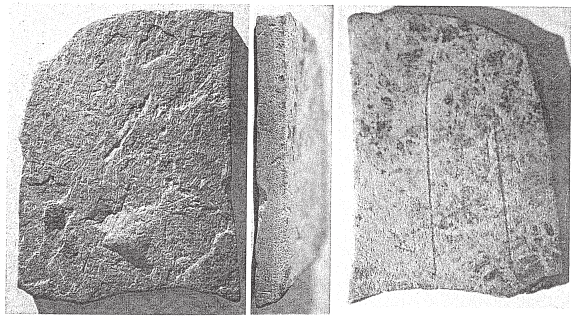
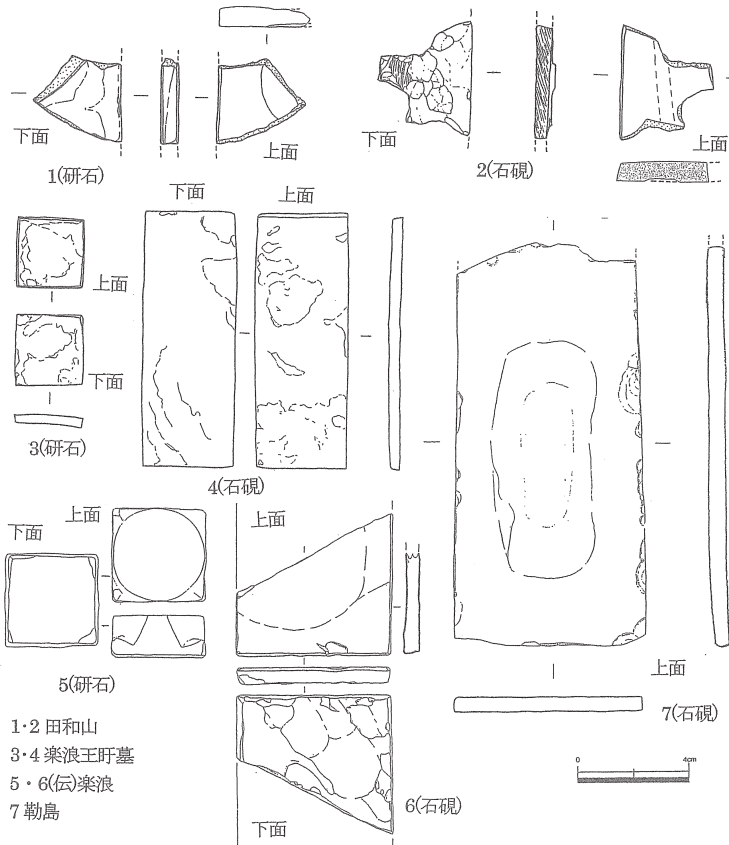


図9 番上硯



- 1・2 田和山
- 3・4 楽浪王肝墓
- 5・6(伝)楽浪
- 7 靉島

図10 日韓の研石と石硯

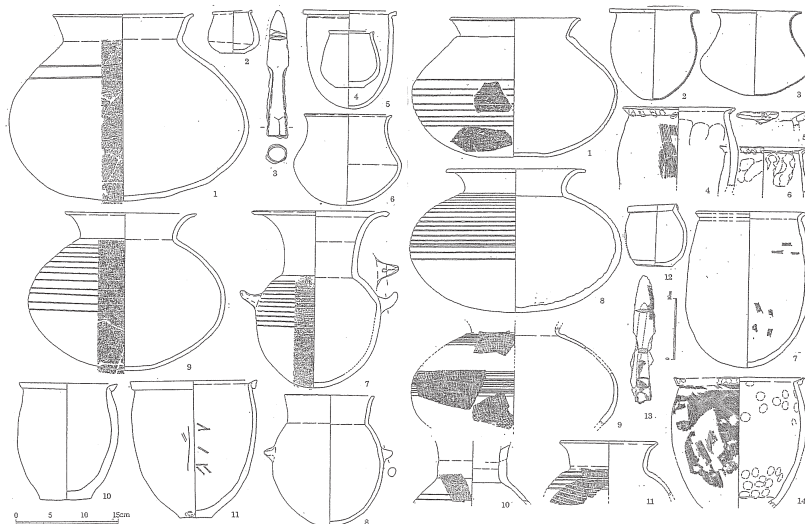


図12 茶戸里の三韓土器

- 1: 35号 2・3: 72号 4: 34号 5: 52号
- 6~8: 31号 9: 64号 10: 18号 11: 62号

図13 日本の三韓土器

- 1: 小姓島 2・3 佐渡白岳 4~7: 三根遺跡山辺地区
- 8: カラカミ 9~11: 原の辻 12: 比恵・別阿可遺跡
- 13: 立岩36号 14: 青谷上寺地

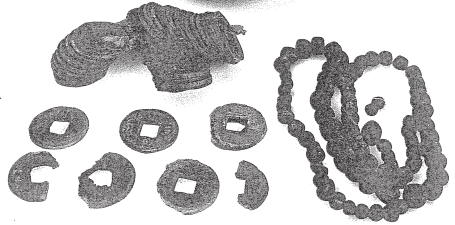
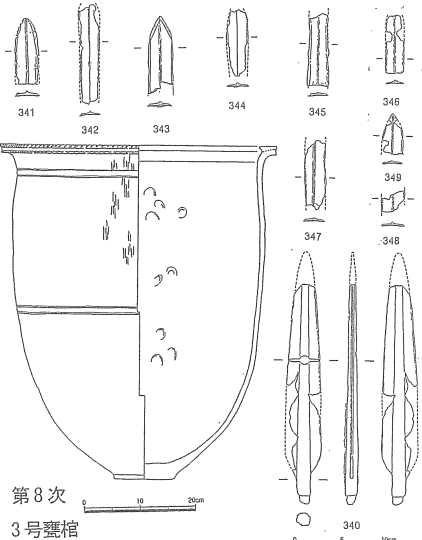
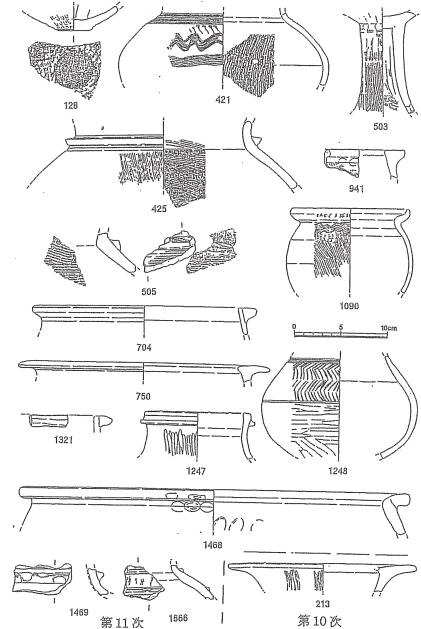


図11 韓国伏龍洞Ⅱ区域1号土壌墓の遺物



第8次
3号墓棺

図14 金海会峴里貝塚の
弥生系土器と関連資料

講師プロフィール



たけ すえ じゅん いち
武 末 純 一

福岡大学人文学部 教授

1950年福岡市生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了(韓国・ソウル大学校大学院留学)。北九州市立歴史博物館、北九州市立考古博物館、福岡大学助教授を経て現職。現在、九州考古学会会長、九州古文化研究会代表、原の辻遺跡調査指導委員。専門は弥生・古墳時代の日韓交渉考古学と集落構造論。著作に『土器からみた日韓交渉』(学生社, 1991年)、『弥生の村』(山川出版社, 2002年)、『弥生時代の権』『福岡大学考古学論集』2 (2013年) 等がある。



アン ヘ ソン
安 海 成

釜山博物館 学芸研究士

1981年韓国・釜山市生まれ。東義大学校大学院史学科碩士(修士)課程修了。専門は三韓時代の鉄器。著作に『板状鉄斧の変遷と社会的性格』(東義大学校碩士学位論文, 2010年, 韓国語)、「板状鉄斧副葬と葬送儀礼」『塙端林孝澤博士古稀紀念論叢』(2014年, 韓国語)、「板状鉄斧鉄素材説再考」『博物館研究論集』21 (2015年, 韓国語) 等がある。



ふる さわ よし ひさ
古 澤 義 久

長崎県埋蔵文化財センター 主任文化財保護主事

1981年京都市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。専門は東北アジアの先史文化・中国貨幣。著作に「東北アジア新石器時代土器の交流」『韓国新石器時代土器と編年』(2014年, 韓国語)、「鷹島海底遺跡出土太平通寶についての一考察」『高野晋司氏追悼論文集』(2015年)、「壱岐島の紡錘・ケーズミ」『民具マンスリー』48-9 (2015年) 等がある。

平成 28 年度 東アジア国際シンポジウム

大海を渡り、一支国に至る。

—国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流—

壱岐会場

2016 (平成 28) 年 10 月 22 日 (土)

壱岐市立一支国博物館[3 階多目的ホール]

長崎会場

2016 (平成 28) 年 10 月 23 日 (日)

長崎歴史文化博物館[1 階ホール]

主催 長崎県埋蔵文化財センター

共催 釜山博物館、長崎歴史文化博物館、壱岐市立一支国博物館

後援 長崎市、壱岐市、長崎市教育委員会、壱岐市教育委員会、魏志倭人伝のクニグニネットワーク参加教育委員会 (福岡県教育委員会、佐賀県教育委員会、福岡市教育委員会、飯塚市教育委員会、春日市教育委員会、朝倉市教育委員会、糸島市教育委員会、宇美町教育委員会、唐津市教育委員会、神崎市教育委員会、吉野ヶ里町教育委員会、対馬市教育委員会)、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、壱岐新聞社、(株)壱岐新報社、NHK 長崎放送局、NBC 長崎放送、KTN テレビ長崎、NCC 長崎文化放送、NIB 長崎国際テレビ、壱岐ビジョン株式会社

科学分析トピック

原の辻遺跡出土大陸・半島系土器の中に赤色顔料が塗られた土器が確認されました。そこで、その赤色の成分について長崎県埋蔵文化財センターが保有する蛍光X線分析装置を用いて分析しました。



写真1 赤色塗彩楽浪系土器

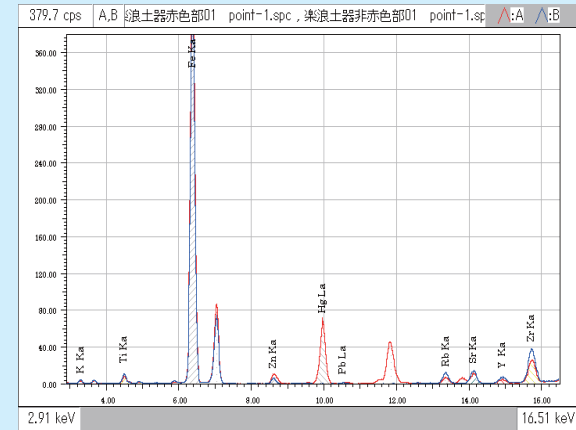


図1 楽浪系土器の分析結果

楽浪系土器の赤色が塗られている部分と塗られていない部分の成分を比較すると水銀（Hg）で大きく差が出ましたので（図1）、顔料は水銀朱である可能性が高いものとみられます。



写真2 赤色塗彩三韓系土器

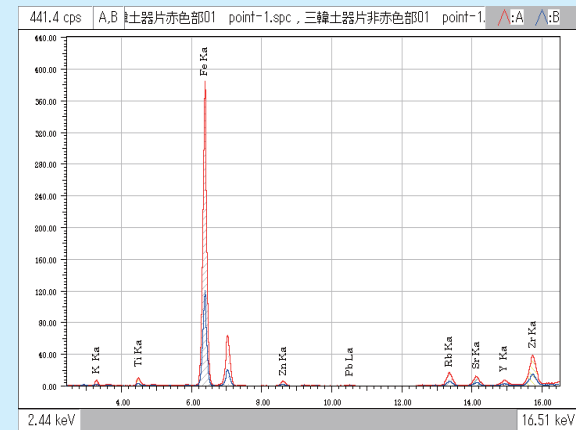


図2 三韓系土器の分析結果

三韓系土器の赤色が塗られている部分と塗られていない部分の成分を比較すると鉄（Fe）で大きく差が出ましたので（図2）、顔料はベンガラである可能性が高いものとみられます。

- 今回の成分分析の結果、楽浪系土器と三韓系土器の赤色成分が異なるので、相互の直接的な関係はないことがわかりました。
- 楽浪系土器を含む漢代の土器には赤色塗彩される例が大陸・半島ではしばしばみられます。しかし、三韓系土器に赤色塗彩される例はほとんど知られていません。
- この土器の解釈は
 - ・ 韓半島に実は少量でも赤色塗彩土器が存在する場合⇒珍しい土器も原の辻に持ち込まれた
 - ・ 韓半島には本当に赤色塗彩土器が存在しない場合⇒原の辻に持ち込まれた三韓系土器に弥生人が赤色塗彩したとなります。

三韓系土器に赤色塗彩された事例が韓半島に本当に存在しないのか、今後も研究を進めていきます。